特116
681

由利郡地誌

教育勅語煥發滿三十年記念

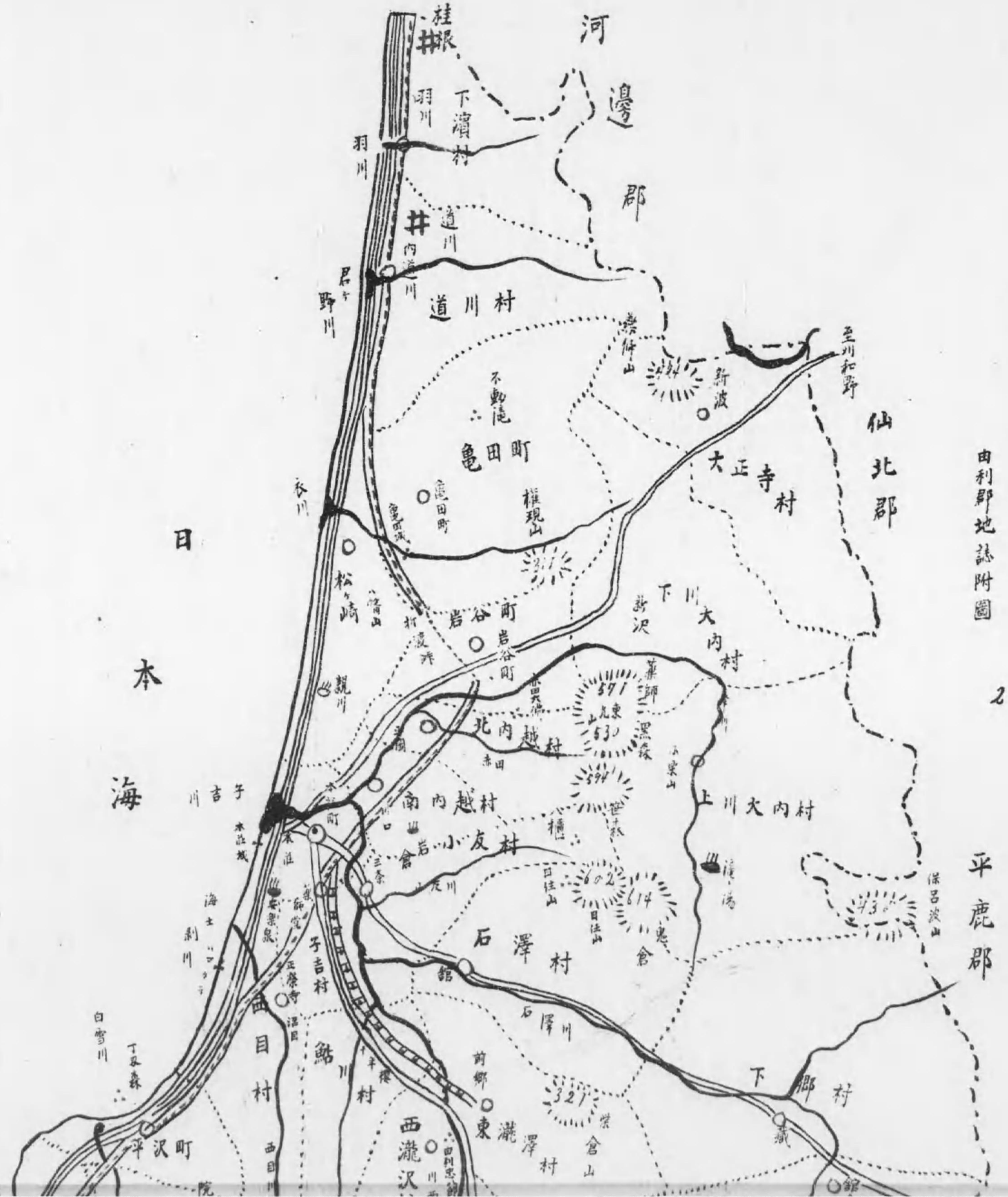
由利郡教育會編纂

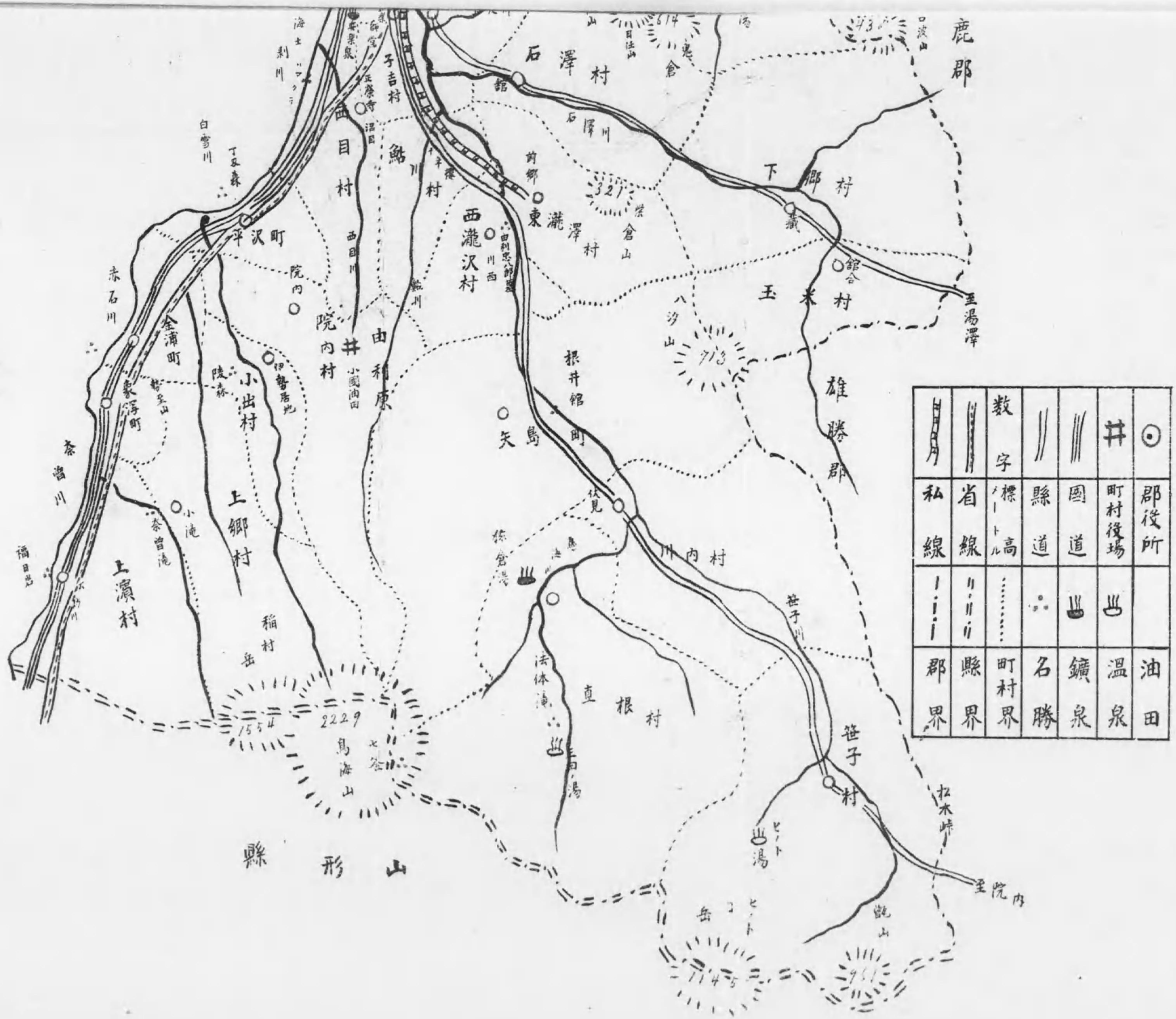
始

秋田縣由利郡略圖

由利郡地誌附圖

1/200000





月	省線	数字	縣	國	井	⊙
私線		標高メートル	道	道	町村役場	郡役所
郡界	縣界	町村界	名勝	鑛泉	温泉	油田

特116
681

由利郡地誌

緒言

本書は由利郡教育會の決議にかゝる教育勅語喚發滿三十年の記念事業として編纂いたしたもので、內容は小學校及實業補習學校の教授參考書の程度にとどめました。

私は本書を編するに當り次の二點に注意いたしました。科學的なるべきこと其一趣味あるものたるべきこと其二であります。從來の地誌と稱する書にありがちの乾燥無味なそして非科學的な羅列的述方をなるべく少くして興味の間に科學的地誌の一班をうかがひ得る事を理想といたしました所々に編者の紀行文やマヅイ寫生をさ

大正12.6.6 內交

ましたものもこれが爲であります。

輓近地理學の進歩著しく特に人文地理方面の新研究は目覺しいもの

があります。本書亦幾分其流を汲んだつもりでありますが編者の淺學に加ふるに拙劣な文字の爲に思ふことを充分述べ得なかつたことを遺憾といたします。

郷土地理を完全に理解するには該博なる基礎的智識を要すること勿論でありますが願くは本書によつて幾分か最近地理學發達の傾向をのぞき又幾多の疑問を提出せしめひいて各町村郷土地理研究の一刺戟となり、それが大建築の際の棄石の一ともなることが出來れば私の仕合せとするところであります。

終りに本書の資料を御與へ下さいました學者諸先生並に各町村學校當局の厚意及編纂補助の勞をとられたる坂垣庄三郎君に感謝の意を表します。

大正十一年八月三十一日

編纂委員　小野純治謹識

由利郡地誌　目次

第一篇　特殊の地理的現象　一

一、海岸の砂丘と白波の美觀　一

二、鳥海山の壯美　三

三、象潟の地文的研究　二六

四、瀑布の豊富と甌穴の奇觀　四〇

第二篇　地文(自然地理)　五一

一、位置　五一

二、境界　五一

三、面積　五二

四、地形　五三

1、總論　五三
2、山系　五四
3、水系　五六
4、海岸　六〇
5、地形と人文　六二
一、總論　六二
二、山地と人文　六四
三、平野と人文　六五
四、高地と低地　六五
五、横谷と縦谷　六六
六、海岸の形式　六八
五、地質　七〇

1、火山岩の分布　七〇
2、第四紀層の分布　七一
3、第三紀層　七二
六、氣候　七二
1、氣温　七二
2、風向　七三
3、雨量　七三
七、生物　七九
1、森林　七九
一、針葉樹　八〇
二、針濶葉樹　八一
三、濶葉樹　八一

四、黑松防砂林　八一
2、動物　八一
第三篇　人文地理　八五
一、住民　八五
1、人口　八五
2、人口の密度　八六
3、人口の分布　八八
4、言語の分布　八八
二、產業　九〇
1、農產　九〇
2、畜產　九一
3、林產　九三

4、水產　九四
三、交通　九六
1、道路　九六
一、國道　九六
二、縣道　九六
三、郡道　九七
2、鐵道　九八
3、水路　九八
第四篇　各論(處誌)　九九
本莊町　九九
子吉村　一〇七
西目村　一〇九

平澤町　一一二
金浦町　一一四
象潟町　一一五
上濱村　一一八
上郷村　一一九
小出村　一二一
院内村　一二二
矢島町　一二四
直根村　一二九
川内村　一三一
笹子村　一三二
玉米村　一三四

下郷村　一三五
石澤村　一三七
東瀧澤村　一四二
西瀧澤村　一四三
鮎川村　一四五
小友村　一四七
南内越村　一四八
北内越村　一五〇
岩谷村　一五五
下川大内村　一五八
上川大内村　一六一
大正寺村　一六三

亀田町　一六五
松ケ崎村　一七〇
道川村　一七二
下濱村　一七五

第一編　持種の地理的現象

一　海岸の砂丘と白波の美觀

由利の海岸は平澤以北は砂濱で平澤以南は磯濱である。磯濱は鳥海火山の噴出岩が海岸まで崩れ落ちて出來たので芹田の岬や金浦象潟の所謂「潤」といふ入江や福田の岩壁など頗る凹凸に富んだ海岸となつた日本海の磯波が岩に突き當つてくだけて玉と散り昇つて白烟となる誠に壯觀たるを失はぬ。

平澤以北は殆んど一直線をなした砂濱がつづいて秋田市に至つて居る。此は第三紀の水成岩から出來た出羽丘陵の間を流れてきた川々のもたらした砂であつて本荘から親川に至る沿岸の砂濱の如きは清麗

洗ふが如く磯波の白く打寄するところに赤い夕日が照り渡る風景は何ともいへぬ美しいものがある。

然して此砂濱には一帶の砂丘が發達して居る一年の大半日本海から吹き寄せる西風は海岸の磯波と共に絶へず砂を陸地の方に吹き飛ばす爲に風向と直角をなして脈狀の砂山をなすのである、砂丘特有の形は風に面する方は其傾斜のろく背く方は其傾斜急なことである、砂丘は自然の儘に放任すれば漸次內地に浸入すること次の如くである。

第一圖ハの如き砂丘が出來た後は其上をニの如く風が吹いてイの部分の砂を持來して渦流作用によつてロの部分に砂を落すから山は矢の方向に進んで行く

終には都邑田園をも埋沒することも珍しくない、だから砂丘の出來る樣なところには松、ぐみ、はまごう等の植物を栽殖して砂丘の進行を防がなければならぬ、古來砂防工事の忽せにすべからざるは周知の事實である。

本郡で砂丘の發達著しいのは本莊町を最とし西目村、金浦町、上濱村の沿岸之に次ぎ松ヶ崎村、道川村、下濱村にも多少の砂丘を見ないところはない何れも黑松を以て防砂林を造つて居る。

一　鳥海山の壯美

位置　鳥海火山脈の主峯たる鳥海火山は、山形縣飽海郡吹浦村、遊佐村、蕨岡村、日向村、高瀨村の五ヶ村、秋田縣由利郡の上鄕村、院內村、象潟町、金浦町、矢島町の五ヶ町村に亘つた廣大な火山で頂上の火口火口

湖の邊は一圓飽海郡に屬して居る。

構造　此山の構造は噴出物の堆積が層々相重なつて出來た成層火山であるが火口丘新山の如きは塊狀をなして居る部分もある。

形狀　鳥海火山は舊火山新火山及稻村岳の三大火山から成立つて居る。

舊火山は笙ケ嶽から鳥の海遙拜所八丁坂を經て月山森に連結した線を火口壁としたものであつて鍋森は其火口の內にある乳房山に屬し鳥の海は鍋森形成後に出來た爆裂火口に外ならない。

新火山は舊火山の東北にありて七五山連嶺を火口壁とし新山及荒神嶽は其火口丘である而して新火山から噴流した熔岩は舊火山の火口內に流下したものと認めらるゝ新舊火山の噴火口は共にほぼ馬蹄形をなし舊いのは南方に開き新しい方は北方に開いて居る。

稻村岳は舊火山の北方に分立するもので地形上から又之を構成する熔岩の性質等より觀察すると舊火山よりももつと古く以前からあつた火山の殘塊であらうとは中島理學士の說である。

地質　鳥海火山に屬する噴火口、塊火山、爆裂孔等はほぼ東西に并列し火山活動の中心は東西に走るところの弱線に沿ふて移動したものであることが知れる。

鳥海火山の基底地質は東北地方第三紀層の上層にして鮮新期に屬し動物化石を埋藏し又石油を胚胎し主として頁岩及砂質頁岩から成立つて居る。

層向は大略南北に走つて居るから本火山は恐らく南北の弱線に沿ふて噴出したものであらう。

各火山丘より噴流した熔岩は凡て輝石安山岩に屬するもので主要

鳥海山頂上の図

本荘城趾より望む

鑛物は斜長石、輝石、角閃石、橄欖石及磁鐵鑛である。

泥流も所々に噴流し其主なるものは上濱村方面の寄生火山なる猿穴圓錐丘より流れ出して火山の西側に擴布するものと舊火山より中の澤に沿ひ火山の南側に噴流したものである。

風景　鳥海山は出羽富士とも秋田富士とも云はれて居るが南方から見ると餘程見劣りがする由利郡から見た景色が最もすぐれて居る樣に思はれる。

御物川流域方面から見ると中腹以下がかくれて圓錐形がまことにうるはしく見える。

湯澤より鳥海山を望む

男鹿半島からも晴天の時は海をへだてて殊の外立派に見える。

田山花袋氏は次の如く云はれて居る。

（鳥海山は私の好きな山だ最も好きな山だと言つても好い位だ富士山や岩木山などよりもつと好きだ群山の上に屹立して聳えてゐる形がいかにも好い本莊の町の橋の上から見た姿などは殊にすぐれてゐる象潟から見たのも好かつたむしろ象潟の風景は昔海水が入込んでゐる時分にも鳥海山にあつたらうと思はれる鳥海山がなかつたらその風景は十の九を減じたであらうと思はれる。

その鳥海山の裾が西に靡いて日本海に落ちてゐる即ち大師崎のあるところであるそれは北から來れば小砂川から峠路にかゝつてゐるのであるが丁度峠の上まで來て吹浦の方を見渡した景色は實に何とも云はれないと私は思つた左には鳥海山が立つてゐる右には日本海がひろく横つてゐる長風わが衣を吹くといふ感じが私の胸に簇つて來た）

私は鳥海山の景は男性的なりと言ひたい富士は八面玲瓏天下の美であることは論なきところであるがやさしみに富んで强みにかくるところがないか鳥海は之に比すれば圭角に富んで居然として勇士のおもかげを備へてゐるではないかと思はれる。

噴火の歴史　敏達天皇七年（西暦五七八）正月十六日大噴火（小瀧舊記）

和銅年中（西暦七〇八乃至七一四）宿世山（鳥海山の古名）火煙吹き出し

酒田港より鳥海山

人々麓を去る事三里(小瀧舊記)大同元年(八〇六)中地震あり其後鳥海山の地心鳴ること久し(小瀧舊記)

弘仁年中(八一〇乃至八二三)見火(三代實錄)

天長年間(八二四乃至八三三)鳥海山大破裂をなしたる爲め白雪川に灰水を流し魚類皆死す(小瀧舊記)

貞觀十三年(八七一)四月八日山上有火、燒土石、又有聲如雷、自山所出之河泥水溢、其色青黑、臭氣充滿、人不堪聞、死魚多浮、壅塞不流、云々(三代實錄)

元慶八年(八八四)二月二十五日大霧晝晦し十月二日是より先出羽秋田城鏃を雨らし飽海郡石を降す鏃に似て南に向ふ。

延喜十五年(九一五)七月十三日出羽國言上、雨灰高二

寸諸郷農桑枯損之由(扶桑略記)

天慶二年(九三九)噴火あり(本朝世紀)

萬治二年(一六五九)鳥海山燒(仁賀保日記)

天文五年(一七四〇)五月上旬山上、瑠璃の壺、不動石、硫黃谷の所、東西三百間南北八十間程土石燒出し七年程燒て止む硫黃明礬の氣北方に流下する諸水に混じ其害作毛海藻魚介に及ぶ(出羽風土記、大泉叢誌)

案するに瑠璃の壺は荒神嶽の東方に接せる火口丘にして頂上に火口趾あり孔底の東側に水を湛ふ不動石は瑠璃の壺の東腹に峙てる屏磐なりしならんか(今村博士)

享和元年(一八〇一)(七月二日)昨冬より輕微なる噴煙ありしが是に至りて瑠璃の壺の附近より爆裂し尋いで熔岩を噴出して新山を作り以て荒神嶽の東側を被ひ瑠璃の壺及不動石を埋む。

文化元年(一八〇四)六月四日山麓地震あり

文政四年(一八二一)新山と大澤との間に破裂し白灰雲霞の如く立昇り上郷の田堰に灰汁を注ぎ馬糧の草を害し此爲に堰川の魚類は死滅し馬匹は疫病に罹れり(小瀧舊記)

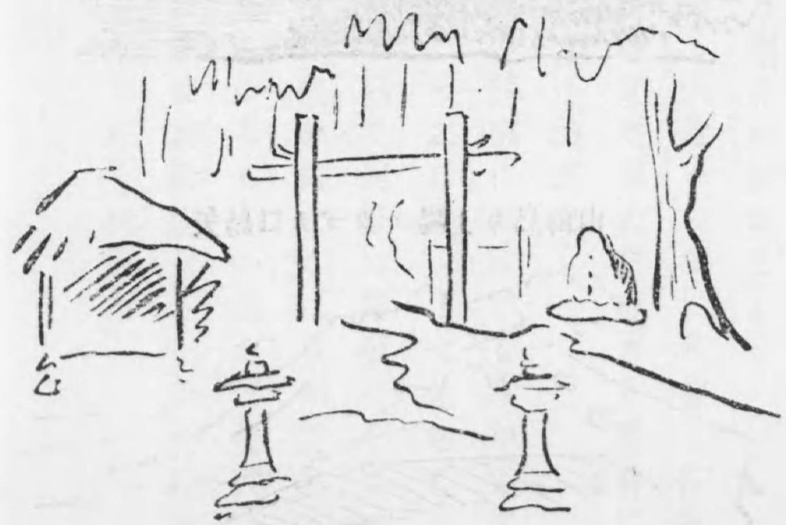
鳥海山は現今全く休眠の狀態にあれども享和年代には二千米突の高所より熔岩を流出せしめ之に伴へる文化地震は火山性地震の最大限度を示せる程なるを以て其勢力輕微なりとせず然れども文政度の餘噴火後今日尙ほ靜粛を保てるは享和文化年度の勢力の消耗餘りに大なりしに由るものならんか而して噴火口の位置の明かなるは何れも現在の新山或は其附近なるを以て記錄に殘れる噴火は大抵此位置に於てせしならん(今村博士)

岩倉臺より鳥海山を望む

矢島口カゴタテ場より鳥海山

木境藥師

横中生徒遭難碑



三合目

二千六百四十尺

祓川の左鶯川の上流赤瀧の景

矢島口

ハライ川

六合目

サイノ河原

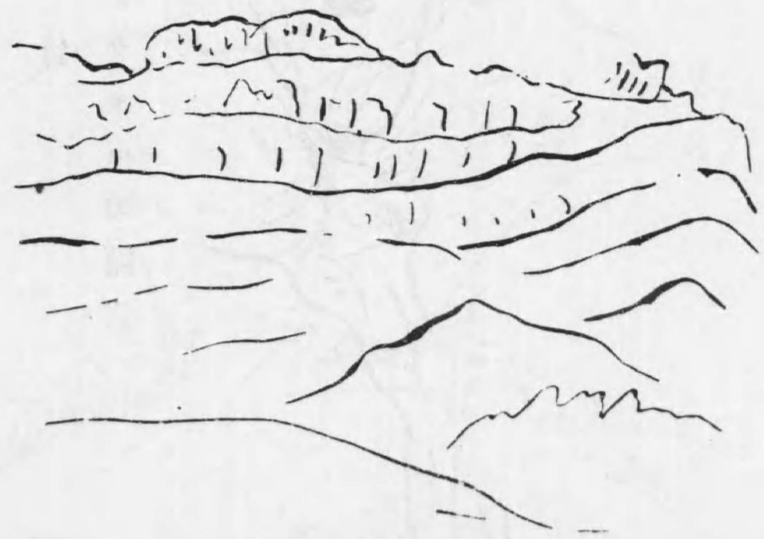
雪白

八合目

ナナツカマの甌穴

火口丘

新山より七高山の火口壁内面を臨む



新山の絶頂を臨む

む臨を海本日西りよ頂山新

方れ割の丘圓山新

む望を森鍋りよ面方湖口火海の鳥

む望を岳神荒りよ道浦吹

よせ意注にるたへ生の草

八月十三日午前五時行者嶽より南東雲の海

湖口火海の鳥りよ近附所拜遙

荒神岳頂上より北に新山を望む

八月十三日午前五時外輪山行者岳より新山を望む

三　象潟の地文的研究

象潟は古來天下の名勝であつて歌枕に擧げられ能因、西行、芭蕉はさらなり多くの文人墨客に訪ねられ松島のそれにも勝りて其風景が稱せられたところであるが今は昔にかわる田圃となつてわづかに其面影をとどむるのみである今其地文的研究に就て述べることゝする。

象潟の今昔に付て大橋教授は次の如く云はれて居る(秋田縣教育雜誌)

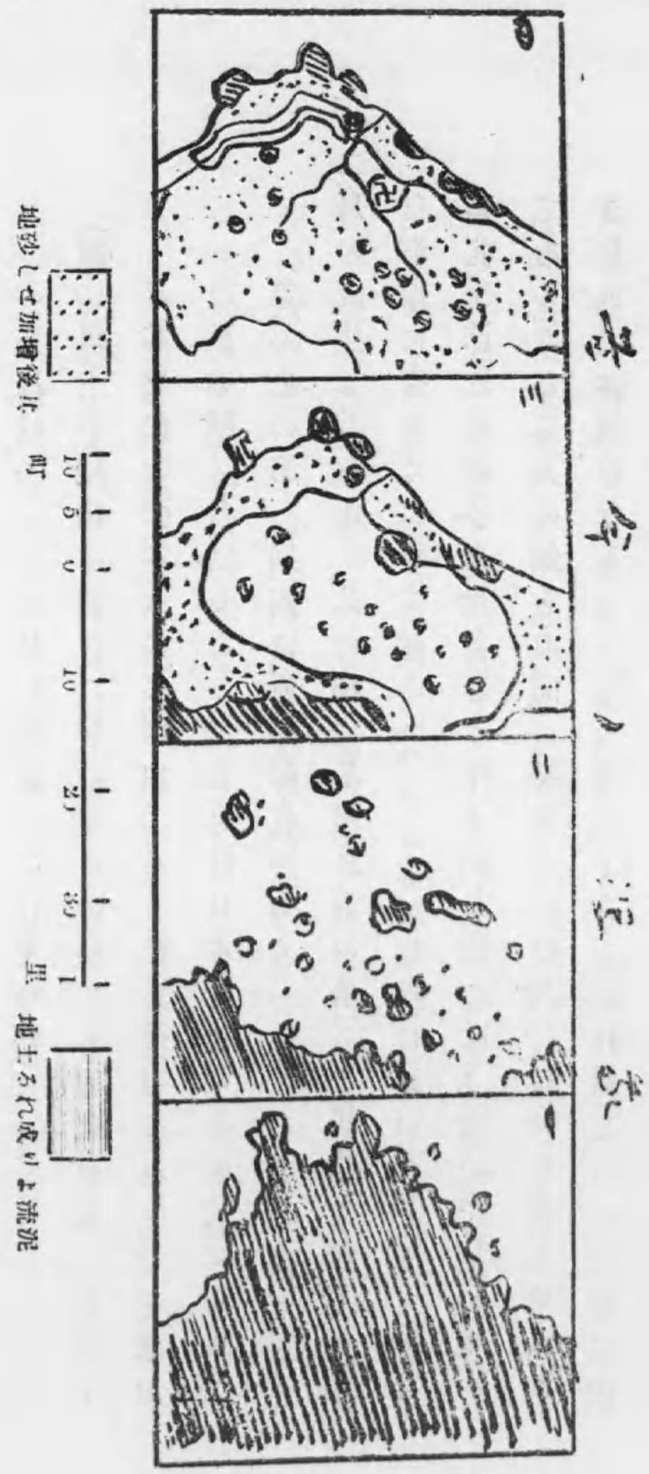
一、潟となる以前　抑象潟の地は地質學上如何なる所であらう此所は鳥海火山裾野の末端であつて土地は全く鳥海の噴出物から出來て居る此地の起源は鳥海火山活動史の末期即ち彼の美い大圓錐體も略完成した頃の事活動は既に噴出期より漸く老衰して爆裂期に入り火山體の所々に爆裂作用頻々として起り殊に火山の西北側に當りては大爆裂が起つて山體を破壞し其生成物たる岩塊土砂は泥流となつて丁度象潟附近を目指して盛に押出したのである此頃象潟は陸地より稍離れた海中であつたが此泥流は海に溢れ出て、新に陸地を造つたのである先年櫻島の噴出するや熔岩を海中に流し出して陸地を生じたのと同樣で象潟の場合は熔岩の代りに泥流であつた。

これは史上に傳はる嘉祥三年(紀元一一〇一年)の地變なるものと同一であるか否か明言することは出來ない史によれば此時の地變は沿岸陸地の低落であつたらしいこれは一見前述の場合とは事情が全く相反して居る樣であるが予の所見によれば必ずしも左樣でない即ち泥流押出しの次に來る變動は必ず沿岸の低下若くは波浪の浸蝕による新成地の浸水であるこれは櫻島でも既に

活動後地盤の低下を起しつゝあるのでも明である象潟は初め泥流に依つて海から現出して陸となり(附圖一)次で地盤の低下及波浪の浸蝕に依り此新陸地は數多の小島に分離したのである(附圖二)そしてこれは決して一朝一夕の急變ではなくして泥流押出後十數年の間の徐々として斯くの如く變つたのである(これと同樣の地變は寛政四年四月一日肥前温泉嶽の爆裂の際にも起つたこの時は島原の海岸に泥流を押出し新に陸地を作り且其先端は數十の島となつた)以上は象潟の激變期であつてこれを分り易く列記すれば左の如くである。

(一) 象潟の地は泥流押出し前は海底であつた。

(二) 鳥海の西北の大爆裂に依て多量の泥流を流したこれが海中に溢流して象潟の地は初めて陸となつた。



(三) 其後十數年間に地盤低下と波浪の破壞作用との爲泥流地の先端は多くの小島に分裂するに至つた。

(四) 以上の變化は割合に短い年月の間に大變化を起したので且其變化の張本人は鳥海山である故に予はこれまでを象潟の激變期と名けるそしてこれは日本歴史なら神代であつて象潟史の第一期或は原始時代である。

二、鳥の成生と其變遷　此の後は最早鳥海の著しき活動も無く平和な海岸に寄せては返す波の「ウネリ」が無限に續いたそして例の西北季節風は秋冬春、秋冬春と年々同じ樣に吹き續いて居つたのである、そして人の知らぬ間に靜かに一粒又一粒砂を流し來り吹き集めて砂嘴を作りつゝあつたのである此材料となつた砂は決して大河によりて多量に供給されたものでは無い附近の陸地や島の沿岸を徐々に取り作つた砂であつて波が粒々辛苦の產物である從て砂嘴も八郎潟の場合と異り小規模のものである。

此砂嘴の完成に依て象潟は初て立派な「潟」となつたのである人々が住地を求めて潟のほとりに集り來たのも砂嘴が完成に近づいてからの事である此頃は象潟の盛期で花ならば滿開人ならば二十歳前後の青年である(附圖三)然し此時代は長くないやがて凋落の秋が近づく殊に同地は元來泥流が波の努力で漸く切り開かれて浸水し其稍高い所だけが島となつて水面に頭を露はして居るのである水底と雖も極めて淺い島々から水に削られ又は自然に崩れ落る土砂でそれが益々淺くなり行くことは自然の運命である八郎潟に比べて　(一)餘程小形であり　(二)水も淺く　(三)土砂の原料を供給する島が潟内に無數に存在する象潟が迅速に乾涸

の運命に陷つたのは當然のことで天命とあきらめる外はない象潟は實に薄命の美人であるそれでも此全盛期は少くも三百年以上に亘つたのである。

三、象潟乾涸の原因　史の傳ふるところに依れば文化元年(紀元二四六四年)六月四日の大地震で突然象潟の地盤が隆起し潟の水は全く涸れて今日の如き狀態に變つたと言はれて居る然し此傳說を其儘に信ずることは早計である此時の地震が象潟乾涸の動機を爲した事は信じ得るが　(一)乾涸が土地の隆起に原因したるや否や及び　(二)乾涸が斯の如く迅速であつたかどうかといふ事には大に疑の餘地が存するのである。

此頃の象潟は地震の如き突發的の動機がなくとも漸次乾涸の狀態に近づいて居たのであるところへ文化の地震が起つて其乾涸の期を早めることになつたこれまでの經過は地質學者の見地から見て自然の推移であるが次に起るのは地盤の隆起問題である今日の學界の程度では地震の結果地盤の水準に如何なる變動を來すものかに就て定まつた答は出來ないのであるしかし何れかと云へば地震の爲に地盤の低下すること普通にあり得ることで隆起することは若しあるとすれば餘程特別の場合でなければならぬ象潟が此特別の場合の例に屬するとは容易に首肯することが出來ぬそれ故乾涸の理由を隆起に歸するのは明確な其證據を捕へ得た上でなければ無理である然らば隆起に依らずして何に依つて說明し得るであらうか少々六ケ敷い議論になるが地震の結果次の場合の何れかを來たしたならば土地は隆起せずとも潟の水は乾涸したであらう。

（一）地表の變動
　（い）潟に注ぐべき流水の減少
　（ろ）潟の排水路の容易となること
　　（ア）砂嘴の部分の低落に依りて
　　（イ）土砂の崩し落ちに依りて
　　（ウ）新通路の開通に依りて

（二）地下の變動……地下水準の低下

この中（一）の（い）の如きことは此時起つたらしく思はれない多分（一）の（ろ）か或は（二）か若くは兩者同時に原因となつて潟の乾涸を來したのであらう其詳細を決定するには是非此の地變前後の精細なる地質狀態を比較しなければならぬ地變後の狀態は即ち今日の有樣であるが地變以前の事情は之を明にする手段が全く無いので如何ともすることが出來ぬただ推察によりて（一）（ろ）の（ア）若くは（イ）の場合及（二）の場合が此時の主な原因と認むるに最も穩當であると考へるのである、次に第二の問題がある、それは此乾涸が突然に起つたか否かと云ふことで突然起つたとは受取り難いのである、年代を經た後から見ると一瞬間の樣に思はれる出來事も其當時は決して地震は確かに瞬間的の出來事であるが、潟の排水は早くも數ヶ月以上を要したこと、思はれる或は數年も十數年もかゝつたので地震後間もなく乾涸したやうに傳へられるのは誤であるかも知れぬ、左樣であつたならば地震は象潟の乾涸には影響するところが大きくなかつたのである、象潟の乾涸は自然に徐々として起つた現象でたまたま其頃大地震があつた爲に當時の人は其れを乾涸の原因であるやうに誤解してしまつたのかも知れぬ、要するに象潟乾涸の原因は今日から確定することは不可能の

問題である、たとひ地震が無かつたとしても又其結果地下水等に變動がなかつたとしても今日は既に潟の水は涸れて居るべき筈である。

ただ無暗に象潟の絶景を廢滅に歸せしめたのは地震の所業である様に云はれては地震が大に迷惑を感ずるかもしれぬから余は地震に代つて彼れの責任の極めて輕微であることを辯明して置かう、云々

次に今村博士の説は左の如くである。

文化元年(一八〇四)六月四日夜鳥海山の西麓を中心とせる大地震あり由利郡に於ける死者百八十三人潰家二千棟飽海田川の莊内二郡に於ける死者百五十人潰家三千五百餘棟に及ぶ今舊記によりて各郷村に於ける震度を比較するに象潟は最高位にあり全戸數五百二

十三戸の内四百二十三戸潰れ六十五名の死者を出せり加ふるに潟の内外變して陸地となり天下の名勝も一夕にして其風光を損せり當時俗に之を潟地震と呼びたりとぞ。

是れより先き潟の内外次第に淺くなりつゝありしは事實にして是は主として南方上濱よりの砂の吹寄せと北東部に水流の運搬せる泥砂とに因れるものなるべく土地の漸次の隆起は或は有りしならんも其證左を得す陸地測量部の水準測量も去る明治三十四年に一回施行せられたるのみなり然れとも象潟の舊態を失へるは斯の如き徐々の變化に因るにあらずして當時數尺の平均深度を有したる清澄なる海が此際突然變して海面と略ほ同高なる平地となりしものなり蓋し當時象潟に莅める臺地に於ては土地の沈降を生したりしこと三尺位なりしを以て低地に於ては其反作用として隆起もあ

りしなるべく同時に盛なる泥砂噴出をなし以て陸地を形成したるなり當時名主の屆出によれば此泥砂噴出のみを以て地變の唯一の原因となせるものゝ如し曰く泥湧出して象潟並に大淵を埋めて陸の如くなさしめ小淵は入津の船出航し難しと尙信ずべき傳說の唱ふるところも略之に同じ象潟は斯くの如くして其風光を傷けられたりと雖も九十九島の翠松奇巖今も猶ほ一面の水田上に浮ぶあり て其恨めるが如しと稱せられし狀は之を想見することを得へし云々然るに安永七年(二四三八)平澤元愷氏が象潟に遊べる記事に左の如きものあり、文化元年に先たつこと二十六年なり。

(漫游文草三游奥曆)游蝦滿寺　寺臨海灣而建　乃出所構蚶潟古圖以參考　多與今不相合也　古人有言　何必松洲月　我憐蚶潟秋其餘國歌所咏　豈皆溢耶　蓋有變遷爾　余向作松島記　或恐其語爲蚶潟所奪　既至　何啻霄壤　古來與松島並稱者　海灣與洲嶼相類耳　灣口僅可丈許　而灣長五里　廣一其五　水淺可厲　如此而已　洲嶼磊落　此之松島　兒孫哉　余已失望　不欲泛舟而游　將栓東行李而發　無奈秋雨淫淫耳　寺僧來訪懇留又留一日　廿五日再遊蚶滿禪寺　供膳極潔　旅中艱得者　午後與僧泛一船　以縱觀有與作不同者　因作記以貽

此一文は安永七年の頃の象潟の古圖に記載するところとは餘程變つて淺くなつて居つた事を確め得るもので大橋教授の論文に裏書きするものゝやうであるが末段船を泛べて之を見ると昨と同じからざるものありといふて明かに風景の賞すべきところあるを語つて居るこれから僅々二十六年にして地震なくとも自然的に乾涸したとはどうしても考へられない結局秀麗なる象潟は砂嘴の發達と流水の作用と

で漸次に淺くなつて風景を損じつつあつたがたまたま文化の大震災によつて隆起と土砂の噴出なる二つの作用が直接に働いて終に潟の水を全く乾涸せしめ現在の有樣に近くならしめたと考ふるのが至當であらうと思ふ。

四　瀑布の豐富と甌穴の奇觀

古往今來滾々として流れつつある水流は漫然看過すると何の變りもないやうであるが其實時々刻々に大地の岩石を削つて止まない如何なる高い山岳も如何に堅固な岩々も幾萬年の後には碎き破られて泥土砂礫に化せられてしまう水の浸蝕力も亦偉大なるものと云はねばならぬ此作用を目のあたり實見するのに都合のよいのは瀑布と甌穴であらうと思ふ。

我國は地形一般に峻險なるところ多きが故に瀑布の豐富なること著しいが由利郡にも少くはない既に知られたものでも鳥海山の白糸瀧、法體瀧、小瀧(奈曾瀧)を始めとし亀田大瀧、赤田大瀧などは有名なもので中には水力利用の發電所として人生の產業の密接の關係を有するものもある。

瀑布は河の上流地方で堅い岩層と軟かい岩層との境目に多く見るところのもので奈曾瀧の如きは鳥海山の熔岩が一大斷崖をなして居るところを奈曾川が流れ落ちるのである。

瀑布の多い地方には又往々甌穴の發達を發見する甌穴はジャイアントケツトルともポツトホールとも稱して河床の上に自然に造られた湯漕(ゆぶね)のやうな飯櫃(いびつ)のやうな奇麗な穴を云ふので地文學上水の浸蝕作用を見るのに誠に都合のよいものである。

凡そ山岳高地に湧出する泉水は低地に流下するに當つて種々の岩石を浸蝕して大小の溪谷を作るものである然るに其谿間の岩石地層には硬軟種々の質を有し軟なるは硬なるものより水蝕を受け易いから上より下に向つて多くの階段が出來る谿流が此階段を流れ落るに當つて所謂瀑布をなし瀑布は強い勢で下の岩層に落るから漸々岩を穿つて凹みを造る諺に點滴石を穿つと云ふの類であるそうかうする中に凹みの中で水は渦をなして回る其中に硬い砂礫がはいつて回轉運動をすると益々凹みを深くして小瀧壺狀のものを形成する次に階段が削磨さるゝにつれて瀑布は漸次に退却し小瀧壺のみが恰も湯槽の如く殘る之を甌穴（Pot—Hole）と稱し其形鍋若くは釜に似て居るので又巨人の釜（Giant Kettle）とも云はれて居る。

佐藤教授は甌穴發達の原因につき次の如く述べられて居る。

第一甌穴は可なりに凝固せる岩石を盛に浸蝕しつゝある河流に限りて成生す。

第二甌穴を穿つに必要なる砂礫を停滯せしむる爲に多少の窪處河底に存在するを要す。

第三河流は少くも浸蝕の利器たる砂礫を相應に運搬するものたらざるべからず其運搬するところの砂礫の量多きに過ぐるときは砂礫は浸蝕の利器たらずして却て沈積せらるゝに至るなり又過多の砂礫を運搬する河流は河底の窪處に停滯するも之を充塡して甌穴を生せしむるの機會を與へず。

第四河底の窪處は次の原因の一によりて生ず。

1 成層の不規則(成層面の凹凸あれば浸蝕面も凹凸を呈す)

2 波痕(淺海に成生したる水成岩に屢々ある現象なり)

3 結核的團塊を含むこと(石工が俗に「玉」又は「玉石」と云ふ)

4 不規則の溶解(這般の甌穴は石灰岩より成る地方に多し)

5 節理(岩石を縦横に貫通する節理面は甌穴と關係あり)

6 岩質の不均一(水蝕力に對する抵抗力の強弱)

第五甌穴の起源は必ず前述の構造上の弱點の一又は一以上の存在するによるなり。

第六甌穴の巨大なるものは殆んど全く今は見るべからざる既存の理由によりて成生せるもの、如し。

第七甌穴の直經の擴大することに就ては一定の說なし或は流水の遠心力によりて擴大すると主張するものあり。

第八甌穴の深さは次の諸原因に關係する者の如し。

イ 水の分量

ロ 流水の速度

ハ 運搬する砂礫の多少

第九甌穴の發達は次の事情により影響せらるゝこと尠からず曰く流水の方向曰く岩石の性質構造及位置曰く節理面の傾斜曰く二三の甌穴の合同是なり而して流水の分量及其速度が同時に影響することは云ふ迄もなき事なり。

今節理面の傾斜の甌穴の發達に關係ある所以につき一言せんに節理面水平面に對し垂直なるときは甌穴も亦水平面に對し垂直に發達すべく節理面水平面に對し傾斜するときは甌穴も傾斜すべし。

甌穴の發達する岩石が均一質なるときは甌穴の壁面は平滑なるハきも堅岩と軟岩と互層するときは軟岩の部分は多く浸蝕せられて凹み堅岩の部分は浸蝕せらるゝこと少くして突起すべし。

甌穴の成生は峽谷を穿つに大なる關係を有するものなり又甌穴が横に發達し隣接の者と相會する時は一種の天然橋を成生するに至るなり甌穴の浸蝕作用は蓋し洪水の際に行はれたるもの多し云々

由利郡小友川八櫃の甌穴に付ては余の不完全なる記事あり次の如し本莊から横手街道に沿ふて廿六木橋を渡り小友村に入り中の澤を經て畑坂を越へると小友澤に出る之は子吉川の支流小友川の流域で略ほ東西の方向に横はる谷間である館前、金山などの村を過ぎると上流は二つに分れる一は北の股他は南の股と稱して各農家が十二三戸もある南の股に沿ふて上ると右に不動瀧の澤を眺め左に龍馬山を望み

漸くに谷は狹く岩石磊磈なる間を川が潺湲として流れる是より多くの岩石を飛び越へながら上へ上へと遡ると終に第三紀の水成岩が平たい階段狀をなして居るところに達する此處に甌穴が立派に作られて徑二尺位のものより六尺程のものに至るまで數箇を發見する形は楕圓のもの多く中に清水を湛へ溢れて小瀑布をなし岩面洗ふが如く青苔之にはらばひ兩岸の絶壁には綠樹空を掩ひ三伏の暑中肌膚猶ほ寒きを覺える此等の甌穴を俗に(やびつ)(ぜんだな)と稱へて居る想ふに八つの櫃の意であらう小林區署の標木には八淵と記してあるが余は八櫃の方が適當と思ふ。

本莊より此處まで二里半許りあるこれより五六丁遡ると流れ益々細く遂に一大絶壁に行きつまる是は卽ち穴瀧と名づくる瀑布で凡そ五丈許りの高さがある頂上より布を引く如くに落ちて居る其下にはま

だ瀧壺と云ふほどのものはないこれから蔦かつらにつかまつて辛くも此崖を攀ち擧ると瀧の上は徑一丈許りの大きな穴があつて滿々と水を湛へ深さ幾許なるを知らず按ずるに絶壁を構成する岩石の裂罅に沿ふて水が浸蝕力を逞ふした結果であらう是れ則ち穴瀧の稱ある

八櫃の穴瀧

所以である穴瀧の上は矢張數段の小瀑布が出來て分水嶺日住山の頂上に達して居る。

八櫃の甌穴

第二篇　地文(自然地理)

位置

四極　北　下濱村の北端　北緯三十九度三十八分

東　三森山(下郷村と八澤木村の境)東經百四十度二十二分

南　甑山(笹子村と及位村との境)北緯三十九度二分

西　大師崎(有耶無耶關)東經百三十九度五十三分

境界

北　河邊郡

東　仙北郡、平鹿郡、雄勝郡

南　山形縣最上郡、飽海郡

西　日本海

面　積

九七、六八方里　北秋田、仙北につぎ秋田縣内第三位、方粁米突にて表せる面積は左の如くであります。

1	直根村	一四二、三五（方粁）	2	矢島町	一二一、〇〇		
3	笹子村	一一〇、一二	4	上川大内村	九五、三三		
5	下郷村	七八、四六	6	玉米村	六六、五六		
7	川内村	六三、五五	8	上郷村	六二、一三		
9	下川大内村	五八、一五	10	院内村	五八、〇五		
11	亀田町	五二、九八	12	道川村	五二、七八		
13	上濱村	五〇、一三	14	大正寺村	四八、二一		
15	鮎川村	四七、〇〇	16	石澤村	四六、四三		
17	下濱村	三九、四七	18	西目村	三七、六八		
19	松ヶ崎村	三〇、九四	20	小友村	二九、一〇		
21	東瀧澤村	二七、九〇	22	北内越村	二七、三八		
23	小出村	二四、七六	24	岩谷村	二三、六九		
25	南内越村	二二、九二	26	西瀧澤村	一九、一九		
27	金浦町	一八、二〇	28	子吉村	一六、九六		
29	本荘町	一四、六四	30	平澤町	一三、八七		
31	象潟町	九、六八		合計	一五〇九、六一		

地　形

輪廓の形は上濱村小砂川附近より東安山に到る一線を底として下濱村桂根を頂とする歪三角形をなし其南邊の長さ九里三十町西邊十五里東邊十八里であります。

2 山系(高地)

本郡の高地は出羽丘陵と鳥海火山の二種から成り立つて居り出羽丘陵を北方から眺めると下濱丘陵、亀田丘陵、笹森日住連嶺、八汐山脈の四ツに大別することが出來ます是等出羽丘陵諸連嶺の南方は一圓鳥海火山の占領するところであります。

(イ) 下濱丘陵と稱するのは本郡の最北部河邊郡と境を接する方面で下濱道川兩村に亘る丘陵でありまして概ね二百米突以下の低い第三紀の小山から成り立つて居ります。

(ロ) 亀田丘陵と申すのは下濱丘陵の南方亀田町の東部一體の高地

を總稱するのでありまして大正寺村との境觀音森山、下川大内村との境權現山等稍高く三百米突を越ゆるものがあります次に

(ハ) 笹森日住連嶺といふものは本郡中央部に著しく秀でゝ居る嶺續きでありまして藥師山(三七一)黑森山(五三〇)笹森山(五九四)より小友峠を經て日住山(六〇二)鬼倉山(六一四)などを含み由利全郡を展望するに適當な地位を占めて居ります。

(ニ) 八汐山脈は日住連嶺と石澤川の谷を隔てて相對し雄勝郡との境に聳立する八汐(七一三)小八汐山(六三六)に連るもので本郡内出羽丘陵中の最高點をなすものであります。

(ホ) 鳥海火山　鳥海火山は郡の南方山形縣との境に噴起した奥羽第一の標高を有する大火山でありまして觀音森を中心とする約十八粁米突の半圓内に包含する大區域に亙つて噴出して居り上

濱村、上郷村、象潟町、金浦町、平澤町の大部院内村、小出村、鮎川村の一部矢島町の一部直根村等の大面積を占め北方長く裾野をなして由利原となつて居ります。

鳥海火山標高の主なる點は七高山(一二二九)扇子森(一七五七)鳥ノ海湖面(一五七五)笙ヶ岳(一六三五)月山森(一六四〇)稲村岳(一五五四)飯ヶ森(一一九八)法體瀧(一一一三)觀音森(六八五)等であります。

3 水系

本郡高地の配置が以上の如くでありますから河流は概して南東から北西に向つて流れて日本海に注ぐのであります子吉川流域、衣川流域、白雪川流域の如きは其主なるものであります。

(イ) 子吉川流域は本流域の他に石澤川及芋川の二大支流を持つて居ります。

本流は鳥海山の東御田ヶ原より出て法體の瀧にて上玉田川を合せそれより百宅川を入れて鳥海川となり大川端にて直根川を入れ川内村伏見にて笹子川と合流し是より鳥海山の裾野と八鹽山脈の間を北西に向つて流れ荒澤川を入れて矢島の盆地を造り漸次に縦谷となつて西瀧澤、東瀧澤村を流れ鮎川村に至つて冬師山由利原より來れる鮎川を入れ右岸にては石澤川に合して子吉の平野を展開し本莊町に至つて北より芋川を入れて西流して日本海に入つて居ります此流程十六里二町であります。

石澤川は八鹽山脈の東雄勝郡の田代川に起り北流して由利郡玉米村に入り下郷村老方附近より西に折れ出羽丘陵を横斷する峽谷たる高瀬川となり石澤村に至り日住山と虚空藏山の間に益々せまりて所謂石澤耶馬溪の勝となり此より石澤川と稱して小友

村に來りて子吉川に注ぎます其長さ由利郡に屬する部分丈で十里十九町に達して居ります。

芋川は郡の東端平鹿郡との境保呂羽山の北より發して西に流れて羽廣の谷を造り鹿の爪附近にて日住山の東方鬼倉山の東麓より北流し來れる瀧の川を入れ是より笹森(東光)山脈に平行して岩の目澤中田代等の盆地をなし平岫にて俄かに西に折れ下川大内の横谷を造り新澤にて小關川を合せ以て笹森山脈の藥師山と亀田丘陵の權現山との間を横斷して岩谷村に出るのでありますそれより米坂にて更に南に展曲して東光山より來たる赤田川を入れ南内越村に至つて子吉川に注ぎます其長さ十一里二十五町で笹森日住連嶺の周圍を迂回するところ概ね二百米突以下の低地のみであるから紆餘曲折の多きこと本郡河川中の最たるものでありますす蓋し芋川なる名稱の起りは紆餘迂回などの轉化ではあるまいかと考へられます。

(ロ) 衣川流域　衣川は亀田丘陵の北端河邊郡界大平藥師の西に發し觀音森の南にて有名なる不動の瀧となり西南に流れて亀田町の谷を造り松ヶ崎村に出て、駒鳴峠方面より來れる下黒川、蛇川の合流なる黒川を入れて日本海に注ぎます長さ三里十五町であります。

(ハ) 白雪川流域　白雪川は鳥海火山輻射谷の一つでありまして鳥海山の北面飯ヶ森の西麓谷に發し北西に直流して上郷村にて左岸に赤川、鳥越川を入れ小出村、院内村を經て平澤町芹田にて日本海に注ぎ長さ六里二十八町あります。

(ニ) 以上三大流域の外大正寺村の一部と下濱村の一部分は御物川

流域に屬するところがあり本莊以北の海岸丘陵を横斷する小溪谷には境川、羽川、雪川、勝手川、君ヶ野川、二古川、芦川、親川、小屋川、深澤川、三川など同形式ものがあり本莊以南には西由利原の鰍澤より出て殆んど海岸に平行して北流し海士剝にて日本海に注ぐところの西目川があつて砂丘を突き破つて居ります白雪川以南には赤石川、象潟川、奈曾川、川袋川などあつて是等は鳥海火山の輻射谷に屬するものであります。

4　海　岸

本郡の海岸線は境川より大師崎迄全長十八里十町ありまして全面積に對して甚だ長いといふことができません殊に北境川より平澤町までの間は殆んど變化のない弓形海岸の長さ十里二十町に亙り旅行者が其單調に驚くところでありますこれはつまり南北に走るところの出羽丘陵に沿ふて出來た併行海岸の然らしむるところであつてやむを得ないことでありますがはまなすの咲きにほふ砂丘の間に磯波がくだけ白玉となり赤い夕日にきらめく景色はまことにすてがたいものがあります平澤から南大師崎までの間は概して鳥海山の噴出岩が海にせまつて出來た磯濱となり長さ七里二十六町程あります平澤灣、芹田岬、金浦灣、象潟灣、小砂川灣、三崎などは出入の主なるものであります。

（イ）海岸の隆起と沈降一般に日本本州の太平洋岸には隆起の跡があり日本海岸には沈降の證據のあることは信ぜらるゝ事實であります加賀の安宅關の跡は海中一里のところにあり本郡道川村は今の内道川の沖合一里のところにありしと云ふ傳說の如きはそれでありますしかし現在の有樣は果して沈降を續けて居るか

否といふことは疑問でありますカリフォルニアの海岸に桑港の良港灣をなせる北獨逸の沿岸に多くの潟や河口に良港の發達せるが如き皆沈降作用のしからしむるところでありますが日本海岸の河口や潟には良港となすべきもの少ないのを以て見ると沈降の海岸といふことが出來ない樣に考へられます。

5 地形と人文

(一) 總論

秋田縣は地形上御物川流域、米代川流域、子吉川流域の三大部分となつて居りまして其最後のものは由利郡で郡内は又數多の小區域に分れて居るといふことは地形の編に述べた通りであります而して前二大流域の地方とは出羽丘陵の山々で自然的に區劃せられ西日本海に面するが故に全く別天地をなして居ります古來史的關係を異にし人情風俗の特別なのは偶然ではありません且本郡は縣の日本海沿岸では最南部に位する爲に最も早く文化の開けたところであります。

我國最初の開發者であるところの出雲文化の傳播は先づ日本海沿岸に普及し御物、米代の兩地方がまだアイヌ族の占居するところとなつて居る時代に由利は早くも頗る高度の文化に浴したのであります。

吉田博士は次の如く申されました。

平安朝の御代の初めには未だ出羽に蝦夷充滿し容易に他鄉より入る能はざりし故秋田に通ふには由利方面より入り海岸傳ひに往來したるなり總へて半開時代の民族は大平原、大森林の附近に居住せず小河流、小平原を中心として開け行くものなり現に尾濃、武藏の如き吾國の大平原は最も後に開け中古は却りて千葉縣の如き所が大

に開化したりしなり秋田の郡部にては由利郡最も早く開けたり今の由利郡は飽海郡と河邊郡の一部とが何時となく合同して出來たるものと思はる何處にても同じ事ながら有名なる古き村落を見れば詰らぬところにて近世に開けし町村却りて大規模に發展しつゝある如き次第なり現況の奈何を問はず由利は最も早く開け平鹿、雄勝の方面は比較的遲れて開けしは事實なり云々

(二)山地と人文　本郡の山地は出羽丘陵の一部に過ぎないのですから深山幽谷などいふべき山地に乏しいので山地として擧ぐべきものは矢島方面、下郷方面、上川内方面の三地方位であります山地は自然界の變化に富み大に人の精神を刺戟することが多いが活動には不便であるから社會的順應力乏しく稍頑固に傾くことがありませう。

(三)平野と人文　平野として擧くべきは本莊附近子吉の平野を第一とすべきでありませう平野は單調のものであるから天然的刺戟は弱いが活動に便利であるから諸地方の民衆が往來し易く社會的の刺戟は多い故に社會的順應力の發達には適する譯であります本莊の人は一般に格段の特色なく平凡のもの多く模倣に長じて居る傾きのあるのは是が爲でありませう。

(四)高地と低地　本郡の地形上石澤川の谷を境として南北に兩分すると南方は概して鳥海山の半腹より其裾野に互つて土地一般に高燥開濶であります仁賀保、矢島方面の人文に幾分かそうした影響を及ぼすことゝ考へられます。

北半は二百米突以下の低地の間を少さい川が流れて居る故に何となく暗い氣分を人に與へて居ります芋川、衣川方面の人文に稍陰欝

の傾向あるのは其爲であるまいかと考へらるるふしがあります。

（五）横谷と縦谷　横谷は山脈の走向を横斷して流れる河の谷でありますから概して平野が廣く大きくなることが出來ないで峽流、狹谷を作り縦谷は山脈の走向に併行して流れる河の谷でありますから其谷幅が廣く大きくなるのが普通でありますを秋田縣の地形について見まするに米代川は出羽丘陵を横斷して流るゝ横谷の一種でありますから鹿角、北秋田兩郡には多くの狹谷が出來て地形複雜を極め山岳の形も種々雜多の格好をして居ります從つて此地方の人情風俗にも其影響が及んで居る樣に見えます鹿角の山河よく湖南内藤博士の如き文人を出すかと思へば北秋にはよく烏潟博士の如き理學者を生む所以でありませう。

御物川の中流以上は奥羽山脈と出羽丘陵の間を南北に流れるところの縦谷であつて所謂上三郡の平野は縣内最大の米産地をなし風物稍や雄大の感を與ふるものがあります住民亦此自然にあやかるもの少しとせざる樣に見えます之を岩手縣北上川の縦谷に高野長英や原敬を出したるに比し幾分の似通ふところがないと云へないでありませう。

以上一般の横谷と縦谷と人文の關係を說いたものでありますが之を由利の地形に見るも其法則を適用すべきもの少くはない樣であります由利の縦谷には石澤川先づ東西に流れて出羽丘陵を横斷し下鄕、玉米、石澤の諸村となつて居り北には芋川、衣川亦相類似せる點がありますが住民の氣質單調ならず圭角あるもの多き所以でありませう縦谷の顯著なるものはないが子吉川の中流地方はほぼ之に當ると云へませう矢島、兩瀧澤の民情之が影響を蒙るものがある樣に

思はれます。

(六)海岸の形式　由利の海岸北半は極めて單調なる弓形の砂濱であつて出羽丘陵は近く海にせまつて居ります單調にして屈曲なき海岸には人の集まるところが少く刺戟がないから產業も文化も盛になり難いのを常としますこれ此海岸には同形式の小村落の外には繁華な都會の起り得ない理由でありませう但し桂根、道川の如き石油の噴出あつて人の集まり來るのは例外の場合であります。

平澤以南の海岸は鳥海山噴出岩の海にせまつて居る爲に出入凹凸やゝ多き磯濱となりますから比較的人の集まりも多く刺戟を受くることも多いから平澤、金浦、象潟、小砂川など幾多の都邑の發達をうながした譯であります而して此等の都邑は庄內地方の沿岸都邑と共に昔の出羽の海岸としてかなり古い時代から文化の發展した證

據があるのであります。

又此海岸は鳥海山を背景にして山水の風光頗る麗はしく氣候もやや温暖であるが故に避暑避寒の遊覽地乃至別莊地などゝして適當なところも少くありません、近頃鐵道の開通以來是等の各町村がしきりに名勝地の發表宣傳に努力するのは結構なことで少しもとがむべきではありませんが町村是の方針から眺めて見れば遊覽地として盛んならんとすることを望むのは頗る考ふべきことであらふと思はれます、遊覽地氣分といふものは其地方の人心に好影響を與へないのは事實であります、しかし各町村は堅實なる產業の立脚地を有して其上に名勝地繁榮の策を講ずるのは勿論望ましいことであらうと思はれます。

地質

地質　本郡の地體を構成する地質は比較的單純でありまして大體第三紀の水成岩層の間に新火山岩の噴出したのを骨子となし其後の削剝作用によつて河流の沿岸に第四紀の沖積層を作り海岸の浸蝕になる沖積土は亦狹き海岸平地をなしたものであります。

(1) 火山岩の分布　鳥海火山の噴出物は笹子村丁嶽(ヒノト)より下直根、矢島町川邊を經て西目村潟保に引かれたる直線より南西の殆んと全部を包含すと云ふへく唯小出村伊勢居地の北部と上濱村西中野澤の一部に少許の第三紀層の露出を見るのみであります。

次に八鹽山に大なる火山岩現はれ其北西に移りては中央高地たる日住、笹森連嶺亦火山岩であり更に芋川の谷を隔てゝ河邊郡との境

にある大平藥師山、高尾山に於て御物川に沒して居ります。此一線の東部平鹿郡、雄勝郡の境に至る間には保呂羽山を始め火山岩の噴出が點々散在して居ります。

西部の火山岩は本莊町の北方新山、御嶽山より岩谷村權現山に現はれて居ります。

(2) 第四紀層の分布　第四紀沖積層の分布は川內村下川內より本莊町に至る子吉川の沿岸島田目より鮎瀨に至る石澤川の沿岸、下川大內村高尾、葛岡より川口に至る芋川の兩岸及西目川の沿岸に發達したものは本郡の中心にして且最大なるものであります。

其他子吉川の上流にては上笹子附近石澤川の上流にては老方附近衣川の下流亀田町附近に稍々廣き沖積地があります。

其他海岸に於ける第四紀層では桂根より松ケ崎に至る沿岸地帶を

第一とし次に平澤町附近及象潟町附近に出來たものを著しいものとします。

(3)以上第四紀層及火山岩層の所在以外の地は悉く第三紀層に屬する砂岩、粘板岩、頁岩、礫岩等からなつて居ります。

氣候

今秋田測候所十五個年觀測の成績による氣象圖により本郡の氣候を大觀しますれば

(1)氣温に於て平均攝氏十二度の等温線は桂根より郡境を通り大正寺村に出て上川大内村、下郷村に來り雄勝郡に行つて居ります。

次に攝氏十三度線は本莊の北方より略子吉川に沿ふて矢島町、直根村方面に通過して居ります。

十三度五の線は平澤、金浦より象潟の北方を通つて居ります。

十四度五の線は三崎峠の西方にあります。

(2)最多風向は本莊附近及象潟附近は西風で矢島附近は北西風です。

(3)年平均の雨量は鳥海山の北東方面即ち矢島町、直根村、川内村、笹子村、は雨雪の量最も多く二千二百粍より二千五百粍に達して居り其他の地方は一千八百粍より二千二百粍の間にありますそして等雨量線の主なるものを見ると千八百粍線は本莊町の北より南内越村、上川大内村方面に至り二千二百粍線は上濱村より矢島町に至り二千五百粍線は鳥海山の東面直根村より笹子村に至つて居ります。

以上の氣候の要素によりますと一般に本郡は本縣中最暖の地方で就中金浦、象潟より南方は高温度のところで雨量も亦少からぬ事を表して居ります。

次に本郡中二三地點の氣象統計を掲けますれば

平均溫度(攝氏)小笠原列島にては二十度以上恒春にては二十四度二

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年平均	觀測年數
象潟	二、八	三、一	六、四	一二、八	一六、六	二〇、八	二四、三	二七、九	二四、一	一七、三	一一、一	五、一	一四、〇	18
本莊	一、四	一、五	五、一	一一、五	一六、三	一九、六	二三、九	二六、四	二一、九	一五、七	九、一	三、三	一三、一	20
矢島	〇、九	一、六	四、六	一一、四	一七、〇	二一、〇	二四、二	二六、六	二一、九	一五、三	八、六	二、八	一三、一	20

平均最高溫度(攝氏)臺北にては三十八度六

象潟	四、九	五、一	八、七	一五、一	一九、八	二三、八	二六、九	三〇、二	二五、七	一九、九	一三、五	七、六	一六、七	16
本莊	三、九	三、九	七、九	一四、四	一九、四	二三、三	二六、五	二九、〇	二四、八	一八、六	一三、四	六、〇	一五、八	19
矢島	三、七	四、三	七、九	一五、二	二〇、五	二四、五	二七、五	二九、六	二四、九	一八、六	一一、九	五、七	一六、一	17

平均最低溫度(攝氏)落合にては氷點下三十八度五

象潟	一一、六	一一、七	〇、五	五、一	九、〇	一四、八	一八、五	二一、二	一六、五	一〇、九	五、七	一、三	八、二	16
本莊	一三、九	一二、九	一〇、六	四、四	八、四	一三、五	一七、八	一九、三	一四、九	九、〇	三、九	一〇、六	七、〇	19
矢島	一三、六	一四、一	一一、九	三、四	七、八	一三、八	一七、一	一八、七	一四、三	七、九	二、八	一一、五	六、一	17

雨雪水量(粍)八丈島にては三千六百十四粍に達す。

象潟	一三四、二	九五、三	九〇、五	八七、三	九二、一	一〇六、一	一七〇、五	一七一、七	一八〇、〇	一六八、六	一八九、四	一七五、二	一六〇七、七	18
本莊	一三五、六	九三、七	九二、五	九五、三	九八、三	一三四、七	一七七、三	一七五、〇	二〇二、八	一七〇、〇	一八二、〇	一七一、〇	一七六五、七	20
矢島	二一七、八	一七六、〇	一四三、〇	一二七、八	一一八、五	一三九、六	二三〇、八	二三七、九	二〇六、八	二三〇、八	二七二、一	二六一、八	二七九、四	17

暴風日數

象潟	三	二	三	二	一	一	一	二	二	二	三	五	二七	18
本莊	四	三	二	二	二	一	一	二	三	二	三	四	一九	20
矢島	四	三	四	四	三	二	二	二	二	三	三	三	三	20

最多風向　午前十時一回觀測

象潟	北西	西	西	西	西南西	南西	北	西	西	北西	西	18

本莊　北西　北西　西　西　西　西　西　東　東　西　北西　西
矢島　北西　北西　北西　北西　北西　北西　北西　南東　南東　北西　北西　北西　北西　20

以上の統計によりますと本郡の氣候は本縣内にては最も温和で住みよい氣候のやうでありますが更に全國の氣候殊に太平洋沿岸地方に比べますると氣温概して低く雨雪多く冬季の西風强烈を極め温度の變化比較的急激で稍大陸性を帶ひ低氣壓性の暴風も少からざる等普通に餘り宜しからぬ氣候として見られて居ります、併し夏季は梅雨の影響著しからす七、八月の頃には快晴打續いて暑氣亦酷烈ならず、冬季の峻烈な風雪の打續く氣候を償ふて餘りあるといふべきでありますされば本郡の氣候は頗る人生の刺戟に富むだ住民の能率を進め得る可能性を持つた良い氣候といふべきであると思ひます、之に付ては中目教授の氣候と文化との關係といふ説を參照いたします。

氣界に於ける刺戟については米國のハンチングトン博士の研究が最も權威あるものと思はれる、同博士は氣候と文化との關係を專門に研究して居る人である、氣温の能率に及ぼす影響に於ては極寒と極暑とかの兩極端は不利益であるが氣温の變化せぬのも亦能率を減少すると云ふて居る、そして一年中に最も能率の高いのは秋であると説明して居る恐らく秋は晝夜の温度の變化を適當であり又一日一日と温度が降つて行く具合も能率を進めるに適して居るからであらう、次に注目すへきことは今日の文明帶が低氣壓帶即ち暴風と一致して居ると云ふ説である、是なども文化を進めるには單に氣温の變化の如き弱い刺戟のみならず暴風の如きものと强烈な刺戟も必要だといふことになる博士は能率を進めるには轉地が必要だといふ其理由としては之に因て温度の變化を感ずるからだといふ私は温度の變化のない時

でも轉地によつて能率の增進を認めるから之は地形や風景の刺戟も共に原因をなして居るものと信ずる。私がハンチングトンの說に最も感心する點は「良い氣候」の定義である。氏は吾人の能率を進める氣候を以て良いとして居る。吾々も今後は良い氣候の定義をこの樣に訂正したいと思ふ。夏は暑からず冬は寒からず醉生夢死に適する氣候は健全なる人類に取つては決して良い氣候ではないと思ふ。此の如き土地は病人の保養地としては至極適當であるが健全な人間が棲むと先づ神經衰弱に陷り續いて他の病魔も襲ふてくる。我國も鎖國攘夷を國策として武陵桃源の島國に醉生夢死の一生を送れは足るの德川時代に於ては夏涼しく冬暖かなる土地が着物の入らぬだけでも薪炭の入らぬだけでも利益であつたかもしれぬ。また地中海の氣候が文化に最適の時代であつたならば舊式の良い氣候の土地が人才を出したかもし

れぬ。然るに今日は地中海沿岸の如く雪も降らず暴風も吹かず天氣の良い地方では文化が到底最高點に達することが出來ず却て霧と雪と暴風が威を逞ふする英とか佛獨とかスカンヂナビアとかが繁昌する時代であるメキシコやユカタンの文明は跡を絕つて合衆國の北部からカナダへかけて文明の花が咲く時代である。氣界に於ても强烈な刺戟を要する時代となつて來て居る。人類は氣界の刺戟が弱ければ刺戟を他の方面に求める少からぬ場合に性慾に之を求むることがある而して多數の人は暖國人は早熟なりといふ解釋で滿足して居るのである。刺戟慾求を良い方面に導くことは社會政策として採るべきことであるまいか。

生物

森林

本郡は他の奥羽地方と等しく一體に於て山毛欅帶に屬する地方であります、自然林には山毛欅が最も多く分布して居りますが、山形縣に比較すると反つて杉が多い方で本郡は丁度樹木の分布帶の變り目である樣に見えます、又氣候のところで申した通り本郡は縣内最暖の地である爲に他郡に見られない暖帶性の生物に富んで居ります、例せば竹類の如きは仁賀保地方より西目村を經て本莊町の新山附近まで終つて居る樣であります、又仁賀保地方には無花果、棕櫚の如きものもよく生育し象潟附近には椎、タブの如き暖帶植物をも見ることが出來ます。

今森林分布の概略を記しますと

(1) 杉の如き針葉樹の純林は亀田町、大正寺村、道川村の境界附近にあるものが最も大に

(2) 針濶葉混淆林は下濱村羽川の沿岸、下川大内村の西部岩谷村、北内越村、南内越村、上川大内村の大部に廣く分布して居ます。

(3) 濶葉樹の雜木林は各町村に分布して居りますが最大なるものは上濱、上郷、院内、矢島、川内、直根、笹子に亘る山毛欅にして其他下郷、玉米、瀧澤、石澤の各村にも少からずあります。

(4) 黒松防砂林は本莊町を最大とし子吉村、松ヶ崎、道川村、西目村、金浦町象潟町等之に次ぎ繁成して居ります。

動物

狩獵によつて捕獲さるゝ動物の分布は次の如くでありまして矢島方面、玉米方面、亀田方面に豊富であります。

子吉村　鴨　雉　兎

西目村　狐　狸　兎　鼬　鴨　山鳥　雉

平澤町　兎　貂　鴨　山鳥　雉
金浦町　狐　狸　貂　鴨　山鳥　雉　鷺
矢島町　狐　狸　兎　貂　鵙　鴨　山鳥　雉　ムササビ
直根村　狐　兎　貉　貂　鵙　山鳥　バンドリ
川内村　狐　狸　兎　貂　山鳥　雉　ムササビ
笹子村　兎　鼬鼠　鵙　山鳥
玉米村　狐　兎　貉　バン鳥　貂　木鼠　雉子　梟　鳩　カケス　山雀
　雲雀　鴨　水鳥　川蟬　ハヤブサ　鷹　啄木鳥　鶯　杜鵑　ヒワ
石澤村　狐　狸　兎　鵙　栗鼠　バンドリ　山鳥　雉　鴨
西瀧澤村　兎　鵙　山鳥　雉
鮎川村　兎
小友村　狐　狸　兎　山鳥　雉　鴨　鳴

南内越村　狐　狸　兎　山鳥　雉　鴨
上川大内村　狐　狸　兎　鵙　青猪　鼯鼠（ムササビ）　山鳥　鴨
岩谷村　兎　山鳥　雉
大正寺村　狐　猯（アナグマ）　兎　鵙　山鳥　鳩　雉　鷹　鴨　蒼鷺　樞鳥（カケス）
亀田町　狐　狸　貂　兎　鵙　山鳥　鳩　雉　鴨　カケス
松ヶ崎村　兎　山鳥　雉
下濱村　狐　狸　兎　山鳥　雉　鴨

第三篇　人文地理

住民

人口　一〇二四三八人

1	本荘町	一〇四八二	2	矢島町	六八六七
3	下郷村	四〇九六	4	下川大内村	三八九九
5	上川大内村	三六七七	6	亀田町	三六六二
7	平澤町	三六〇七	8	西目村	三四七一
9	象潟町	三四二一	10	金浦町	三三八二
11	下濱村	三一八〇	12	川内村	三一六七
13	石澤村	三一一八	14	上濱村	三〇三七

15	大正寺村	三〇二八	16	道川村	三〇〇一
17	玉米村	二九二〇	18	松ヶ崎村	二八八八
19	東瀧澤村	二八五一	20	笹子村	二八二五
21	上郷村	二七五〇	22	岩谷村	二七一四
23	子吉村	二六六六	24	直根村	二六〇四
25	西瀧澤村	二五八五	26	北内越村	二二一八
27	小友村	二一六七	28	院内村	二一一二
29	南内越村	二一〇一	30	鮎川村	二〇二二
31	小出村	一九二〇			

人口の密度　面積一平方粁米突に對する密度を算出しますと次の如くであります。

1	本荘町	七一六人	2	象潟町	三五三
3	平澤町	二六〇	4	金浦町	一八六
5	子吉村	一五七	6	西瀧澤村	一三六
7	岩谷村	一一三	8	東瀧澤村	一〇二
9	松ヶ崎村	九三	10	南内越村	九一
11	西目村	九一	12	鮎川村	八六
13	北内越村	八二	14	下濱村	七九
15	小出村	七七	16	小友村	七五
17	亀田町	六九	18	石澤村	六八
19	下川大内村	六七	20	大正寺村	六三
21	上濱村	六一	22	道川村	五七
23	矢島町	五七	24	下郷村	五三
25	川内村	四九	26	玉米村	四四

27	上郷村	四四	28	上川大内村	三九
29	院内村	三六	30	笹子村	二六
31	直根村	一八		平均	六八

人口の分布　上に掲げました人口密度の表によりますと本郡人口分布の有樣は概して山地に少く海岸に多いと云ふ事を示して居り殊に其海岸も本莊以北の單調なる海岸に少く本莊以南の稍屈曲したる海岸に多いといふ事實を發見します但し大正寺村と下川大内村が比較的密度の大なる理由は御物川流域との交通便利なる爲でありませう、矢島町の密度小なるは鳥海の大山地を包含するが爲であります。

言語の分布　言語の分布は一般に舊藩の領土別に左右せられて居ります秋田縣の大部分は佐竹氏の領土でありましたが由利郡のみは之と異つて小藩分立の有樣であつた故に佐竹氏の領地たりし御物川、米代川流域の諸郡とは言語の分布も頗る異つて一區域をなして居ります概して云ふ時は本郡人の言語の發音と假名遣は奥羽地方に稀に見るほど正しい殊に矢島町は其最たるものでありませうこれは山地には古い言葉の保存せらるゝ事が多いと矢島藩主は四國地方より移封せられたといふ影響でありませう。

又音調の上より見ますれば亀田方面の言は優美にして柔かき傾きがあり本莊語は稍々粗い傾きがあります。

又言語と交通の關係から申しますと酒田地方の言語は象潟より平澤あたりまで混入して居るといふ事實を見ることが出來ますこれは仁賀保地方の海岸交通は古來庄内方面と盛であつて海岸屈曲の少き秋田方面と疎遠であつたと云ふ事を物語つて居ります。

農産物價格

1	矢島町	六二八七二七	2	子吉村	五二五七四九
3	石澤村	四八六三七九	4	下郷村	四六〇六七二
5	川内村	四五六七一五	6	東瀧澤村	四五三六一二
7	院内村	四四九〇七三	8	平澤町	四三五二二〇
9	下川大内村	四一二一六三	10	岩谷村	三九八二五七
11	西瀧澤村	三九三六四三	12	金浦町	三八六一五八
13	北内越村	三七九八七五	14	小友村	三六五四三七
15	上郷村	三五九七七三	16	南内越村	三五四七〇六
17	小出村	三五二六三五	18	鮎川村	三四二九〇四
19	本荘町	三四一二〇七	20	象潟町	三三六一九四
21	上川大内村	三一八七四三	22	上濱村	三一六一三二
23	亀田町	三〇九五九二	24	玉米村	二九六六〇九
25	下濱村	二八〇八七七	26	西目村	二七四四三七
27	大正寺村	二五〇五三六	28	直根村	二四七〇五二
29	道川村	二一六五一〇	30	松ヶ崎村	一七五三七一
31	笹子村	一七四四八六			

農産物の主要なるものは米として所謂本荘米と稱して函館、東京、小樽及北海道各地に仕向けられて好評を得つつあるものであります米に次ぎては麥、小麥、粟等の雜穀及蔬菜であつて玉葱の栽培も盛です。

畜産物價格

1	矢島町	三八四一〇	2	下郷村	二八五五一

3	亀田町	二〇四四四	4	玉米村	二〇〇一九
5	下川大内村	一九一八五	6	大正寺村	一六九八一
7	上川大内村	一五九八九	8	石澤村	一五九七〇
9	川内村	一四七六四	10	鮎川村	一四五九六
11	岩谷村	一四五二三	12	下濱村	一四〇九一
13	院内村	一二八九三	14	上郷村	一二四三二
15	子吉村	一二〇四一	16	西瀧澤村	一一一八一
17	西目村	一〇八二一	18	北内越村	一〇七八一
19	南内越村	一〇〇九六	20	平澤町	九八三七
21	笹子村	九五八九	22	小友村	九八二二
23	直根村	八五九三	24	東瀧澤村	八八一七
25	小出村	七二五七	26	金浦町	六四九〇
27	道川村	六三三一	28	本荘町	五五四〇
29	象潟町	二三二八	30	松ヶ崎村	二一六七
31	上濱村	二〇五六		合計	三九二五三三

畜産は馬を主とし牛及養鶏之に次ぎ養蠶業の盛なるは東瀧澤村、矢島町、本荘町、平澤町、象潟町、金浦町、亀田町、大正寺村、下川大内村、川内村、上川大内村、下郷村等であります。

林産物價格

1	上川大内村	一六七九〇九	2	下郷村	一一四二七一
3	上郷村	一一〇三五二	4	石澤村	一〇七五〇〇
5	亀田町	八二七六七	6	矢島町	六九七六〇
7	鮎川村	六〇〇三五	8	玉米村	五五六六七
9	下川大内村	五四〇三〇	10	直根村	五一〇〇〇

11	道川村	四〇八二〇	12	下濱村	三三七八五
13	川内村	三六五〇〇	14	小出村	二六四〇八
15	笹子村	二二二〇八	16	東瀧澤村	二一六三五
17	大正寺村	二一〇九〇	18	院内村	一九四八九
19	北内越村	一七七四六	20	金浦町	一六九九六
21	西瀧澤村	一六〇二五	22	西目村	一四二八三
23	上濱村	一四〇〇六	24	松ヶ崎村	一三一〇八
25	岩谷村	一二二五四	26	南内越村	二九〇〇
27	小友村	二五五七	28	平澤町	一〇四一
29	本莊町	二八八		合計	一一九六四〇〇

林産の種類は木材、木炭、薪、杉皮、林産種子、造林苗木等であります。

水産額

1	平澤町	九八一〇八	2	金浦町	七一九〇六
3	松ヶ崎村	四三二六一	4	象潟町	三六七一〇
5	西目村	二六八二三	6	本莊町	一七九五〇
7	上濱村	一四五五〇	8	下濱村	九九一五
9	矢島町	三七七五	10	道川村	二八一一
11	大正寺村	一九五〇	12	小出村	一三四四
13	子吉村	一〇五五	14	西瀧澤村	一〇三〇
15	上郷村	七八六	16	南内越村	四五〇
17	岩谷村	三六三		合計	三三二七八七

水産に於て鰊は明治二十年頃迄は年々多少の漁獲がありましたが後全く跡を絶ち鰰も松ヶ崎以南には甚少く只近來豊漁の打續くは春季の鰛にして西目、平澤の大謀網有望なりと稱せられます其他の海産に

は蟹、蝦、牡蠣あり河産には鮭、鱒鮎等があります。

三　交　通

1　道　路

國道

秋田より松ケ崎、本莊、平澤、象潟を經て酒田町に至る

縣道

(1)本莊より前郷、矢島、上笹子を經て雄勝郡院内町に至る
(2)下笹子より雄勝郡湯澤町に至る
(3)本莊より小友、石澤、下郷を經て平鹿郡横手町に至る
(4)本莊より岩谷、新澤、萱ケ澤を經て仙北郡刈和野に至る
(5)松ケ崎より亀田、德澤、葛岡を經て仙北郡大曲町に至る

(6)新田より小栗山、岩野目澤を經て平鹿郡大森に至る

郡道

(1)本莊南内越線　國道及大曲線を含む
(2)本莊北内越線　大浦を經て
(3)本莊西目線　國道を含む
(4)小出平澤線　杉山田抓を經て
(5)院内平澤線　國道及小出平澤線を含む
(6)上郷象潟線　國道を含む
(7)直根矢島線　本莊矢島線を含む
(8)本莊鮎川線　藥師堂を經て
(9)本莊西瀧澤線　埋田黑澤を經て
(10)子吉西目線　國道及矢島本莊線を含む

(11) 南内越小友線

2 鐵道

(1) 羽越北線　秋田より新屋下濱道川を經て亀田に至る

(2) 陸羽線西　酒田より象潟平澤を經て本莊に至る

(3) 横莊線西線　本莊より前郷に至る

(3) 水路

(1) 本莊、平澤、象潟、金浦の三港は海上航路の和船を入れ又港外に汽船の寄泊することあり

(2) 子吉川は本莊、前郷間河船の往復に使用せらるる

(3) 大正寺村新波には御物川往復の河船を付けて物資の積卸しをなす

第四篇　各論（處誌）

本莊町

面積　一四方粁六四　第二十九位

人口　一〇四八二　第一位

密度　七一六　第一位

本莊町は北松ヶ崎村に東は南内越村、小友村に南は子吉村西目村に西は日本海に面して居ります。

地形北部は海岸丘陵松ヶ崎村より來りて百四十八米突の新山となり子吉川に浸蝕せられて更に南方に現はれ子吉村に連ります此海岸丘陵と小友山地との間に子吉川の下流が造つたところの大三角洲は本

莊の市街の發達した平野であります、子吉川に上古に於ては子吉村藥師堂方面より今の西出戸町方面を流れて居つたものゝ樣でありますの如き小友村土谷、谷地及石脇方面に迂回する事になつたものと考へられます。

今本莊町に於ける子吉川屈曲の狀態を見まするに先づ二十六木方面より北流し來り右に折れて土谷に衝きあたり盛にガケを崩して居ります、これより西に向ひ石脇東端で芋川を合せ左に向つて神明下を浸し更に右に向つて甚八淵に至り又大に石脇岸を削り對岸の中島に砂洲を造つて居りますそれより左に折れて古雪下、片町、濱ノ町の岸を崩して反對の尾花澤方面に沼澤砂洲を造り之より西に直進して海に入ります明治二十七年八月の大洪水以前には今の水戸口が砂洲であつて川口は右に曲りて田尻の下を過ること七百米突許りにして海に注いだものであります。自然の大勢は以上の樣になつて居りますから護岸工事等をなす際にはよく此大破壞力を計算に入れて之に對抗し得る設計を施さなければ屢々姑息の工事をなして徒勞に終ることが多いと思はれます。

本莊町の海岸は眞直なる低平の砂濱で一年の大半强い西風を受くるため砂丘の發育著しく古來本莊藩に於ても砂防林の造成を怠らず石脇に於ける石川善兵衞翁の植林等あり現今に於ては小林區署の周到なる事業によつて砂防林養成が行はれて居ります。

本町の生產額は農產水產を主とし畜產林產に於ても多少の產出あるも地形の關係上到底商工業によりて立つの外がないと思はれます由來本莊町は本郡の大集散地として又政治の中心地として榮へ海上は

和船航路の要地として新潟北海道間往來の船舶を入れ古雪港の賑へる時代ありしも爾來交通機關の進歩に伴ひ漸次商業の衰頽を來したるを免れません將來適當なる工業によりて特種の物産を出すの途を講ずる事が肝要だと考へられます。

左に本莊港移出入品價格一萬圓以上のものを擧げます、

移出

玄米	一四四、四四六四圓	東京、樺太	仕向先
白米	九一、五〇〇〇圓	北海道	
菜種	一、六〇〇〇圓	新潟	
清酒	二、二〇〇〇圓	北海道、樺太、能代	
醬油	一、一五二〇圓	北海道	
木材	三二、〇〇〇〇圓	新潟、東京	
木炭	一、五〇〇〇圓	土崎、酒田、新潟	
白土	一、五〇〇〇圓	大阪	
合計	三七五、八九八四圓		

移入

砂糖類	一〇、〇〇〇〇圓	東京、土崎	仕出地
干物鹽藏魚	一二、〇〇〇〇圓	北海道、樺太	
海産物	三、〇〇〇〇圓	同上	
生蠟燭	一、五〇〇〇圓	新潟、秋田、青森	
紙類	一、五〇〇〇圓	岩見、東京、靜岡	
瓦	一、〇〇〇〇圓	越中、能登	
笠傘	一、二〇〇〇圓	東京、新潟、越中	
合計	三〇、二〇〇〇圓		

「由利の地形と人文」なる舊稿の中本莊町に關する點を次に記します

三面出羽丘陵で圍まれ一面は日本海の荒波に洗はるゝ我由利の樂土よ、今や羽越沿岸線なる長蛇の來るあつて汝の永い眠りを醒すでありませう、覺めたる將來の由利は眞に奮鬪の由利でなければなりません、か樣にして地形の影響による人文的特色はだんだん融合調和され混一さるゝ時がくるでありませうが此處當分の間は此地方的部落的の色彩が各方面に頭角を現はすことでありませう。

乞ふ少しく是等の色彩について語りませう、由利は南境に鳥海の高峰を擁するが故に一般に陰性的地形を有するものでありますが本莊より下鄕方面に至る一線を境として南北に區分しますと南半仁賀保矢島方面は稍々陽性を帶ぶるが如く北半亀田下濱方面は頗る陰性を帶ぶると見ることが出來ませう、是れ南は鳥海の裾野が廣く高臺狀をなして横はる爲一般に高燥なる地形をなし何となく明るみを帶びた氣分を與へる、海岸も亦磯濱で風景がよい從つて此方面の人心にも自然陽性を與へたものでありませう此方は一般に土地低くして陰性を帶んで居るから人心にも其傾向が見えるやうに思はれます兩者の中間に位する本莊方面は子吉川の本流が各方面の支流の水を集めて海に潮せしむるが如く人文上に於ても頗る包容性に富むのを認むると同時に圭角ある特色を發見するに苦しむの感なき能はずであります、惡くいへばウスボンヤリとも見らるゝのであります鐵道開通後の確實なる方針さへも定め得ない町民の現狀はよく此特徴を現はしたものではありませんか本莊をしてかくならしめた原因を考へて見まするにどうしても史的關係を除外することが出來ません、本莊藩主は小身より起つて封を受けたる爲各方面の浪人を臣下とする必要があつた

從つて其間に特種の藩風を確立するに困難なる事情があつた、それに領土豊饒にして平野廣く百姓有福なるが故に比較的平凡無事の間に藩政を維持することが出來たのであります是が藩民をして稍もすれば無爲享樂の間に一生を了らしむるに至つたものでありませう。之を龜田藩主の大藩の落ぶれにして多くの舊臣を有して狹小なるしかも餘り地味の宜しからぬ封土を受けたことが恰かも米澤藩のそれの如くなりし爲藩士以下百姓に至るまでつぶさに困苦をなめたものと比較すると其人文進歩の特色住民の風習等思ひ半ばに過ぐるものがありませう。

矢嶋も亦大藩の流れではあるが生活の狀態龜田のそれの如くならず天産物も頗る豊富なりし爲舊臣の間には固有の氣風よく保存されて住民に影響を與へた事が少なくないやうに思はれます何れにしても自然は人事を或點まで支配し人生は自然の影響を受ける間に自然も亦史的關係によつて色づけられる地人相關の原理は吾人の社會的進化の運動にかくべからざる素質を與ふるのは爭はれぬことであるから地方の改善に志あるものは此等の點を明かにするのは極めて大切なことであらうと思ひます。(大正九年一月一日)

子吉村

面積　一六方粁九六　第二十八位
人口　二六六六　第二十三位
密度　一五七　第五位

子吉村は北方本莊町に東は小友村に南は鮎川村に西は西目村に境し

地形南方に鮎川山地の連亙するものあり北西の方面は海岸丘陵があり東方一帶子吉の本流に沿ふて中央は一大盆地狀の沃田から成立つて居ります此盆地の中央には上谷地下谷地などの字名が殘つて居る如く昔沼澤地であつた事が確かであり東部は子吉川が幾度か流路を變した事も埋田、藥師堂あたりに古川と稱して昔の河床たりし事實を物語つて居ります、本村の耕地は廣大にして灌漑すべき水流に乏しきが故に所々に大なる溜池を造つてあります北に於ける大堤南方の宮下堤の如き其著しいものであります。

子吉村の產業は地形の關係上農產最も多く其產額實に本郡第二位を占め主として米を出し其他畜產水產も第十三四位を上下して居ります。

本村は本莊町と相接し古來其關係は密接であります、大堤の東に上原臺と云ふ平坦な臺地がありますがこゝが本莊の居住地の最初の發源地であるといふことです都邑發達の順序から申しても高地から漸次平坦な低地に及ぼしたのは事實らしくあります。

玉の池の南方高地を鳴澤臺と申しますがこゝが由利忠八郎の一時たてこもつたところと稱して居りますそして現今では石器、土器の埋藏地として知られて居り砂岸の厚層中には多數の海產動物の化石を見出します。

西目村

面積　三七方粁六八　第十八位

人口　三四七一　第八位

西目村は北本莊町に東は子吉村鮎川村に南は院内村平澤町に西方一帶日本海に面して居ります。

地形は南半概して由利原より傾斜し來つた地から成つて居り其最高點天拜山(三五七)の西方より西目川の源を發して北西の方向に流下して西目の盆地を潤ふし潟端より海岸丘陵を突き破つて海士剝川となつて日本海に注ぎます。

西目盆地は西目川の中流の地を占め本村の主要生産地でありますが昔沼澤地なりしを淵名孫三郎、佐藤重右衞門等が排水工事を起して冗水を海士剝川に流出乾固せしめて現今の耕地を現出せしめたものと云ひます。

海岸線は極めて簡單な直線をなし砂丘の發達著しきものがありますが而して上高屋、中高屋、海士剝の部落は此海岸砂丘上に發達した村落であります。其有樣はローマの原始的國家がチベル河岸の七丘上に發達したのと頗る趣を同ふするの感があります上高屋、中高屋の人類の居住地となつたのはかなり古いものと見えて石器、土器の發見さるゝことがあるので知られます。

本村の産業は農、畜、林、水産の各業に於て何れも相當の産出をなし殊に水産額は第五位を占めて居ります而して本村産業狀況を概觀すると農業に於ては漸次其收量を增し林業に於ては國有林の拂下げ部落有林を統一し保安林の造成を務め更に村基本財産として造林の計畫を行ひつゝあります水産製造業にては肥料の製造を力め牧畜業にありては品種の統一を計り産馬の改良に力めて居ります又副業たる藁工品の産額六萬餘圓に達したのは大に良好なる現象であります。

本村には史蹟名勝天然記念物の調査會が組織されてあつて其目的を實行しつゝあるのは他の村に見られぬところであります。

平澤町

面積　一三方粁八七　第三十位
人口　三六〇七　第七位
密度　二六〇　第三位

平澤町は北西は日本海に面し東は西目村に南は院内村金浦町に境し其輪廓ほぼ三角形をなして居ります東方由利原の續きが三百米突の高地となつて現はれ漸次に北西の方向に平澤灣方面に傾き其間を兩前寺川、大澤川の如き小川が流れて居ります。

西方三森、芹田の間には鳥海山の北面飯ケ森(一一九八)の西方より流れて來た白雪川が日本海に朝貢して居ります。

海岸は北方西目村出戸方面より琴ケ浦までは由利海岸特有の變化に乏しい弓形をなし之から西に折れて芹田岬までのところは平澤灣の沿岸まで漸次岩角突出して磯濱をなして居ります。

平澤灣は日本海岸有數の良灣でありますからもし西北方面の防波堤を設くる等の人工を加へるならば一大商港となることが難くはあるまいと思はれます。

本町の産業は農業額に於て第八位水産額に於て本郡第一位を占め畜産林産も亦多少の産出をなして居ります而して本町の生産狀態を概觀すると總額の約七分は農産で三分は水産工産に屬し所謂半農半漁の有樣でありますから將來も此兩者を産業の基とし其他の副業を行

ひ剰餘勞力を利用して經濟の向上を努めて居ります。

金浦町

面積　一八方粁二〇　第二十七位
人口　三三八二　第十位
密度　一八六　第四位

金浦町は北平澤町東は小出村上郷村南は象潟町に西は日本海に面して略ぼ長方形の輪廓を持つて居ります。

地形は上郷方面より押し出して來た鳥海山の火山岩屑から出來た丘陵から成つて居りまして高さ一般に百米突以下であります河流は上郷の石名坂附近から流れて來て金浦町の南方に注ぐところの赤石川が唯一つあるだけであります。

本町の海岸は赤石濱を除くの外は皆凹凸多い磯濱であつて金浦港は昔は頗る良港として知られて居り港内に山王島沖の島、二子嶋、狐島等あり大船を繫ぐ事が出來たが文化の大震後地盤隆起して水淺くなり現今は僅かに小廻船及漁船の碇泊するのみとなりました本町の産業は農産、畜産、林産の外水産額は平澤町に次ぎて本郡第二位を占め又鑛産には仁賀保石と稱して鳥海熔岩の石材を産します。

本町は昔中山と稱した所で後木の浦と稱し慶長七年金浦と改めました。

象潟町

面積　九方粁六八　第三十一位
人口　三四二一　第九位
密度　三五三　第二位

象潟町は北金浦町に東は上郷村に南は上濱村に境し西日本海に面し地形東方一體鳥海火山岩屑の押出した丘陵で西半は冲積土の海底が隆起して陸地となつた平野の間に火山岩屑の島嶼が點々散在して所謂象潟の古景をしのばしむるものがあります此樣な象潟式の海岸地形は遠く金浦を經て芹田三森附近まで連續して居ります。

今本町沿岸の凹凸を略見すると北の灣入したところに象潟川が注ぎ是より西に物見山の高地が凸出して背後に象潟港を造りそれより南に二ッ石青塚などの小入江ありて大潤の灣入より遠淺にして海水浴場として名高いものであり南方には入湖の潤、新潤、貝湖の潤等の小出入があります。

象潟町の產業は面積狹少なるが爲に農業養畜の業見るべきものありませんが水產額に於ては第四位を占めて居り且つ本町人は北海道方面に事業を經營し若くは出稼ぎをして利益を得るもの少くはありません。

象潟町は五百餘年前より永く仁賀保家の所領でありましたが慶長八年最上義光の領となり寬永八年には酒井氏の領となり同十七年より本莊城主六鄕氏の領となつて廢藩に及びました元鹽越村と稱したのを明治二十九年象潟町と改稱しました象潟は古來天下の名勝として文人墨客の杖を曳くもの多くありましたが今なほ鳥海を背景とした趣きは捨て難いものがあります。

上濱村

面積　五〇方粁一三　第十三位
人口　三〇三七　第十四位
密度　六一　第二十一位

上濱村は北東は象潟町上郷村に南は山形縣飽海郡に西日本海に面した三角形の輪廓をなして居ります。

地形は殆んど鳥海山の西面をなして三崎熔岩、猿穴泥流、靈峯熔岩、小瀧熔岩等の噴出物が海に流下した爲に出來た傾斜面であります東端最も高く一三九五米突に達し之より漸次西北に低く觀音森(六八五)より三崎峠(七〇)に至り大師崎の斷崖をなして海に沒します河流の主なるものは川袋川、奈曾川の二つであります。

海岸は北方奈曾川口より川袋川口に至る間は弓形の砂濱にして砂丘の發達するものがありますが之より南有耶無耶關に至るまでの間には三崎熔岩の流下して海にせまつて種々の凹凸を呈し小砂川附近には板狀節理の發達著しく福殿の岩と稱して有名なものであります小砂川の附近には遠淺にして海水浴場に適するところがあるので汽車開通後浴客が群集して居ります。

本村は地形の關係上農林産に於ては見るべきものありませんが水産頗る豊富であつて本郡第七位を占め殊に海苔鰒の如き特産があります。

上郷村

面積　六二方粁一三　第八位
人口　二七五〇　第二十一位
密度　四四　第二十七位

上郷村は北西象潟町金浦町に北東は小出村院内村に南は山形縣吹浦村に南西は上濱村に境し長方形の輪廓をなして居ります。

地形南東の大半は鳥海火山の半腹であつて北西部は其裾になつて居り千五百五十四米突の稲倉嶽より輻射する數多の谿谷の水は本村の主要部落の發達を促したものであります其河流の主要なるものは稲倉嶽の西方白糸瀧に發し横岡本郷を經て小瀧に於て奈曾の瀧となり上濱村にて川に注ぐ奈曾川及飯ケ森の西方より出でゝ赤川・鳥越川を入れて小出村との境を流れて平澤町に至る白雪川であります。

本村は農産、畜産、林産共に豊富なる産額を持つて居りますが殊に林産物は本郡第三位を占めて居ります是は畢竟南部に廣大なる濶葉樹の森林をひかへて居る爲でありませう。

本村の主邑小瀧村は元鳥海登山の表口たりしところで奈曾瀧の對岸に古社藏王堂あり慈覺大師の作にかゝる木像ありと傳へられて居ります是よりの登山道は矢島口に比すれば頗る險阻でありますが南東の方向に殆んど眞直に靈峯といふ眺望のよい峯を越へて鳥の海に出るのでありますから距離は最も近いところであります。

小瀧の北方長岡村は古來優良なる長岡鋏の産地として名高いところであります。

小出村

面積　二四方粁七六　第二十三位
人口　一九二〇　第三十一位
密度　七七　第十五位

小出村は北東院内村と南西金浦町上郷村に境するところで南東一帶鳥海山の裾野に屬する高地であり其他北西の大部分は白雪川の流域にかゝる平野であります。

本村の産業は農産額林産額を主要なるものとし畜産水産が之に次ぐものであります。

院内村

面積　五八方粁〇五　第十位
人口　二一一二　第二十八位
密度　三六　第二十九位

院内村は北東は平澤町西目村鮎川村に南西は上郷村小出村に境する大面積を持つて居りますが大部分は鳥海の裾野たる由利原の高原であつて最南部は白雪川の上流に屬し中部は鮎川の上流の谷で冬師、釜ケ臺の部落があります北西の一部は白雪川の流域及大澤川の上流であつて本村の主腦部であります。

本村生産の大部は農作物で總生産額の八割以上に當り本郡中第七位を占め之に次ぐものは畜産林産であります畜産は冬師釜ケ臺方面の牛で畜産額中七割を有して居ります農産物の主要なるものは米であつて九千八百石價格四十萬圓に達します。

副業の主なるものは養蠶で之に次ぐものは藁工品であります。

本村の小國は古來石油の産地として其名廣く聞えて居ります現今は殆んど廢坑に屬して居ります。

矢島町

面積　一二一方粁　第二位
人口　六八六七　第二位
密度　五七　第二十三位

矢島町は北方東瀧澤村西瀧澤村に東方玉米村南は川内村直根村に西は鮎川村院内村に境する大面積を持つて居ります。

地形西南の大部分は鳥海火山の山腹及裾野から成つて居り北東方面は八鹽山脈が連互し其間を子吉川が北西の方向に流れて數多の支流を入れ矢島町の大盆地を形成したのであります。

矢島町の産業は農産額及畜産額に於て本郡内第一位を占め林産及水産に於ても頗る多額の生産があり工産(酒類)も少からぬものがあります。

(一)矢島の自然　矢島町は子吉川の上流に於て荒澤川、千砂利川などが合流する處に發達した山間の一大盆地である市街は此盆地の西部高地の階段上に建てられて居るので坂が多く水は清冽である舊陣屋址なる小學校附近から對岸の連山互丘を見渡せば松杉の森林蓊鬱として茂り其間の谷間に田圃菓樹園相連なり右に鳥海の峰を近く望んだ風景は實に自然の庭園を見る如くである。

(二)矢島の人文　文錄年間に西馬音内に落行くまでは由利十二黨の隨一として身長六尺九寸で四尺八寸の大刀を三つ指で抓み食は三升

つゝ一度に喰へりと傳ふる矢島五郎滿安のたてこもつた根の井館の森の如きは如何にも趣味ある岡である。

近くは生駒侯の時代となつては菩提寺として名高き龍源寺の庭園の閑雅なる藩主着用の甲冑武具と共に見るべきものである。

少しく南方の壽慶寺の背後の斷崖は戊辰戰爭の時庄内軍の浸入を受けたところで石塔に彈丸の痕がある其隣りの福王寺には明和六年七月二十日矢島侯生駒主殿の銘ある巨鐘があつて是亦戊辰の彈痕あざやかである此鐘は現在此町の鐘として役立つて居る一時間毎にボーンボーンと鳴る音は無量の感慨を起さしむるに足りる其他幽邃閑雅の趣味に富める廣祐寺と云ふ眞宗の寺もある。

矢島町の南東立石と云ふ部落には楠正勝の開基と傳ふる高建寺があつて臥龍の松は名高いものである小學校の所在地は舊藩主の御殿の

址で堀の前にある松の並木は昔ながらの面影をとどめて居る。

(三) 地人相關の事實　かくの如く自然の形勝によれる矢島人が產業の方面に於て頗る發展して居る盆地に產する米穀實に一萬七千石に餘り森林の養植、蠶糸の製造、酒の釀造等亦大に富力の增進に貢献して居る就中矢島酒の如きは極めて優良なものを造り得るが販路の擴張方は未だ盡さぬものがある。

水力の利用漸次盛大となり精米用の水車は間斷なく運轉して居り鄉內部落に發電所を設けて全町に電燈を輝かす事が出來る樣になつた(大正五年十月五日)

近時新に矢島水力電氣株式會社起り更に多量の電力を供給することになつた。

鳥海登山口としての矢島町　鳥海登山には蕨岡口、吹浦口、小瀧口、小砂

川口、吹浦口の五ヶ所あります、が道路の良好なこと矢島口に及ぶものはありません、將來矢島町に鐵道の便が開けるやうになれば最多數の登山者を吸收することが出來ませう今登山道の模樣の概略を申しますれば町の西端より十三町程稍々急な八坂と云ふのを登りますと龍立場に參ります是からは裾野特有の風景となり八月頃秋の七草の咲きほこる廣野を左に鶴田の池の絶景を眺めつゝ通りますと一里十五町にして木境藥師に達しますこれから俗に木立三里と稱しまして有名な山毛欅の美林となります此間正味二里二十六町にして秡川につきます矢島町より四里十七町こゝまでは矢島町が登山道路として特に改修したところで駄馬はもとより婦人小兒でも容易に登り得る立派な道であります秡川から七高山までは眞の鳥海道とも云ふべき險阻なもので盛夏の候なほ谿間に氷の堆積があり高山氣分を味ふことが出來るので植物も木となり草本となり漸次寒帶性のものも見得るに至ります矢島町より五里十一町山形縣境に近く七ッ釜の奇勝があります是は矢島口の最優なるもので熔岩の谷を水蝕力の威をたくましくした爲に生じた一種の甌穴です。

直根村

面積　一四二方粁三五　第一位
人口　二六〇四　第二十四位
密度　一八　第三十一位

直根村は北方矢島町川内村に東は川内村笹子村に南は山形縣の最上郡及飽海郡に東は矢島町に境し本郡第一の大面積を持つて居ります

地形は殆んど鳥海火山の半腹を占むると云ふべきで東南方面に向つて造られたる數多の輻射谷は集まりて鳥海川となり川内村に流れ落るのでありますは是等輻射谷の主なるものは鳥海山の東面御田ケ原附近より發する下玉田川及三瀧山方面より北流する上玉田川であつて此二流は法體瀧附近にて合し鳥海川となり朝日森方面より來れる百宅川を入れて板平附近より南東に折れ大川端にて直根川を合せて川内村に流落します。

本村の河流は悉く上流水源地の特色を備へ急流瀑布が多く盛に水蝕風化の破壞作用をたくましくして居ります就中法體の瀧は其壯美に於て最たるものであります又上玉田川の岸には温泉の湧出するのを見ます交通の便さへあつたならば温泉場を經營することも至難の業ではなからうと思はれます本村南部鳥海川の沿岸猿倉には古來鑛泉の湧出があるので猿倉の湯として知られて居ます。

本村の地形以上の如くでありますから耕地も少く降雪も多量なるが故に農業畜産等に見るべきものがありませんが林産額に於ては本郡中第十位を占めて居ります。

川内村

面積　六三方粁五五　第七位
人口　三一六七　第十二位
密度　四九　第二十五位

川内村は北方は矢島町雄勝郡田代村東は雄勝郡仙道村に南は笹子村直根村西は直根村矢島町に境して居ります。

地形東北は八鹽山脈連り小八鹽山(六三六)蒲倉山(四八〇)等の峯により雄勝郡と境し西南は鳥海山の麓になります其間を笹子川が西北の方向に流れ矢島町に近くなつて南西の方向より來る鳥海川と合してこゝに大なる扇形三角洲を造り本村の主要生産地を成生して居ります其盆地狀をなして居る具合は矢嶋町に類似して居り小矢島町とも稱すべき地形でありますが役場の所在地伏見村は此盆地の殆んど中心を占めて居ります。

地形以上の如くでありますから本村は農産額に於て本郡第五位を占め畜産、林産に於ても少からぬ生産を占して居ります。

笹子村

面積　一一〇方粁一二　第三位

人口　二八二五　第二十位

密度　二六　第三十位

笹子村は北川内村に東は雄勝郡仙道村、院内町に南は山形縣最上郡に東は直根村に境する本郡第三の大面積を有する村であります。

地形東南西の三面悉く山地であつて東境に月山(六三八)姥井戸山(九二六)大仙山(九二〇)があり南には甑峠(七五一)大森山(一〇七七)萱森(一〇七五)丁嶽(一一四五)等の高峯があり東には水無大森(九一一)朝日森(六二一)があつて丁川が丁嶽より甑川は甑峠方面より出でて上笹子附近にて合して笹子川となり川内村に流れます此兩河の合するところが本村の中心地であります丁川の上流には丁瀧があり且丁の温泉といふのがあつて河中に噴出して居ります鳥海山の周圍には温泉が至つて少

いが丁の湯の如きは著しいものであります。

地形以上の如くでありますから本村の農産物は豊富なりと云ふことが出來ませんが林産は本郡中ほぼ中位を占めて居ります。

玉米村

面積　六六方粁五六　第六位

人口　二九二〇　第十七位

密度　四四　第二十六位

玉米村は北方下郷村に東方は雄勝郡明治村南方雄勝郡田代村に西は矢島町に境して居ります。

地形西境一帶の地方に八鹽山脈が南北の方向に走つて居り其主峰八鹽山は(七一三)鳥海火山外本郡第一の高峰であります高瀬川は田代村より來り八鹽山脈に並行して一大縱谷をなし下郷方面に流るゝところに本村の主邑館合村を始め田代、黑淵等の村落が發達したのであります東部の高地は漸次御物川方面に傾斜するのであります。

本村の畜産、林産は最も著しき産額を示して居りますが横莊鐵道の横手方面開通に伴ひ其他農産工産等も活氣を呈して其取引も主に横手方面と行はるゝに至りました。

下郷村

面積　七八方粁四八　第五位

人口　四〇九六　第三位

密度　五三　第二十四位

下郷村は北方上川大内村に東は平鹿郡八澤木村南は玉米村西は東瀧澤村及石澤村に境して居ります。

地形北方は三方森(三六四)檜山(三〇六)白澤峠(二一六)等の高地あり東方高藥師山(四三八)の高峯聳ち西南は玉米方面より八鹽山脈が連互して居ります其間を石澤川の上流なる高瀨川は玉米村より北に流れ寺田に來りて東より一支流を入れ俄かに西に折れこれより大體に於て西の方向をとり主邑藏村附近にて大屈曲をなし宿、大琴、船木、畑村を通過する際はよく横谷の特徴を發揮して谷は狹く斷崖がせまつて參りまし併し高瀨川(石澤川)の流域は本村にて最も多くの支流を合せ最も多く屈曲をたくましくする部分でありますから盆地の成生も從つて盛んであります老方盆地藏の盆地の如きは最も著しきもので本村の主なる生産地となつて居ります故に本村は農産、畜産、林産に於て何れも多額の産出をなして居ります。

本村は横手本莊間交通の要地に當つて居ることは今も昔も異ることなく殊に舊藩時代は本莊藩主の宿泊地として其本陣があつたと云ふことであります。

石澤村

面積　四六方粁四三　第十位
人口　三一一八　第十三位
密度　六八　第十八位

石澤村は北小友村、東下郷村、上川大内村南は東瀧澤村に西は鮎川村に

境して居ります。

地形は本郡の中央山脈たる日住連嶺と八鹽山脈とが南北の方向に走つて居るところを石澤川が之を横斷して西に流れて子吉川の本流に合するまでの兩岸の平地に本村の部落が發達したものであります鳥田目の東方諏訪の淵と稱する所から字奥ケ澤に至る一里半許りのところが此川の横谷の最もせまつたところで兩岸絶壁をなして谷深く奇岩怪石多く山水の風景稱すべきものがあり新耶馬溪などと云ふて居ります。

石澤村は產業上農產額本郡の第三位、畜產額第八位、林產額に於て第四位を占めて居り鑛產に於ても白土の如き有望なるものがあり富源の要素に乏しからぬことを示して居ります。

日住山(ヒスミヤマ)

十一月十六日は大嘗第一日の御儀にて僕等の如き草莽の微臣にまでも御賜饌の御召を蒙つたけれども禮服が間に合はぬので出市を見合せたところが此日の御天氣は日本晴の小春日和ときて居るから同志數人と日住詣でとしやれ出した。

横手街道に沿ふて二十六木、萬願寺上野を經て雪車町村のはづれから左へはいつて岡崎、瀧の澤などの村落を通り蕨臺といふところから小川に浴うて登り始めた數年前迄は山の登り口に鳥居があつたはづなのに見えないので一寸まごつついた峻しみは東光山にゆづらないが芝山でごくきれいである左手に谷をへだてて立派な地層の褶曲を現はして露頭がはつきりと見える歩一歩に眼界が開けて二の鳥居に來ると眼下に本莊城を臨むことが出來るそれから日住山神社(大日靈神)に詣でんと道をたどるに數百年を重ねた山毛欅、欅、杉などの老木は惜し

げもなく伐り倒され何處が神宮の道やら分らぬやうなありさまだやつとのことで紅葉の落葉で埋められた舊道を見出して御宮の入口にあつた清水に渇をいやそうと思ひきやあのましみづは汚れて飲むに堪へない御宮は二三年前の火事で燒け失せて僅かに礎石のみ殘つて居るあゝあの神さびたる山上の御社あの綠したゝる杉の老木あの苔むした大きな岩石今ははや見るかげもないはげ山となりはて、たきけば火事の前年とか神社合併熱の影響を受けて此日住神社は鮎瀨部落の白山神社に合せられたのでしるしとして小さな石を立てゝ置くのださうだ余は基本金云々の理由の下に由緒ある神社をみだりに合併することには反對するものであるそんなことをするのは敬神愛鄉の良風を破壞する惡魔の所爲である余は切に神社の再建を石澤の人々に勸告するなどゝ理屈をこねながら晝食をすまして山の後口から降りかけた。

白土の坑道　日住山の東面に長田氏經營の白土採掘坑道を見た山腹を横に掘ること五十間眞暗な水のしたゝる坑内をあわれなカンテラを便りにはいつて見ると白粘土が白砂利と層になつて居るところを採つて居る中から螢石などが出ることもあるさうだ。

白土運搬用のトロッコ道について大梁と云ふ村に降りて白土精製工場を見た壓迫器、沈澱池、乾燥場、粉碎器、荷造場等水力電氣を使用して頗る大仕懸けにやつて居る白土の用途は漂白、製紙其他種々の工業に廣く用ゐらるゝさうである。

鳥田目に入るところ石澤川の兩岸巨嚴の奇勝亦見るに足るものがある。（大正四年十一月二十八日稿）

東瀧澤村

面積　二七方粁九〇　第二十一位
人口　二八五一　第十九位
密度　一〇二　第八位

東瀧澤村は北石澤村東は下郷村南は矢島町及西瀧澤村に境し地形は東方一帶八鹽山脈に屬する高地連互して高森山(三一〇)柴倉山(三二一)等の峯となり此等の山間より發する谿流は概して西北の方向をとりて子吉の本流に合するところに冲積の平野を造るのでありますす前郷村は其中心として昔は本莊藩主の代官が此處に駐在して全瀧澤郷を統治したと云ふことでありますす前郷は本莊矢島間の中間に位し且子吉川舟運の終點として交通の要地であります。

本村の產業は農產を第一とし實に其產額本郡第六位を占め林產も亦之に次ぐものがあります。

前郷の南東五十土附近には石器時代の遺物を產するところがありますす前郷の小學校所在地附近は字館と稱し瀧澤氏の城柵であつたと傳へられて居ます。

西瀧澤村

面積　一九方粁一九　第二十六位
人口　二五八五　第二十五位
密度　一三六　第六位

西瀧澤村は北東は子吉川を挾みて東瀧澤村に南は矢島町に西は鮎川

村に境する三角形の輪廓をなして居ります。

地形西方一帶鮎川村に接するところが由利原高原の緣邊山脈狀をなして子吉川に臨み川岸に斷崖をなすところ少くありません東方八鹽山脈の來りて名高山(一九五)なるところ子吉川の谷最もせまり對岸の吉澤部落玉坂と相對して地層の走向よく表はれ一見して其水蝕谷たるを知ることが出來ます玉坂は矢島町との境にあり戍辰の役庄內勢と官軍との劇戰のあつたところで吉澤、新上條等には今に戰死者の墳墓の殘れるものがあります。

本村の中心地は子吉川の左岸田野の最も開けたる川西村であります産業に於ては農產額第十一位を占め米の產額一萬石に達して居ります其他畜產林產も亦主要なるものであります。

川西字奉行免の根城館は由利忠八郎の據つたところで其戰死の碑と稱するものもあります。

鮎川村

面積　四七方粁　第十五位

人口　二〇二二　第三十位

密度　八六　第十二位

鮎川村は北方子吉村小友村石澤村に東は東瀧澤村西瀧澤村矢嶋町に南は矢島町院內村に西は西目村に境する長楕圓形の大村であります地形上本村の大部分は鳥海山の裾野たる由利原の間を院內村より流れ來る鮎川の谷に發達した小村落から成り立つて居ります。

北東の境に子吉川の本流があつて鮎川の流入する處に出來た平地が

本村の主要部となり役場の所在地立井池も此處に出來たのでありま
す南由利原は本村の最南四三七米突より三百米突まで漸次に傾斜せ
る原野にして中央に大谷地と稱する本郡第一の湖沼があり周圍約三
千二百米突あります南由利原の北端屋敷と稱する部落より鮎川の谷
がだんだん廣まり西澤、田代、二タ子、堰口などの發達を見ますが此谷の
西方面が西由利原で東を東由利原と申します由利原は裾野特有の植
物景觀を具へ農牧の地として開發の餘地少からぬ事と思ひます。
本村農産地の中心は鮎川子吉川の會點たる立居地より子吉の本流に
沿ふた黒澤部落に至る部分であります本村は農産以外畜産、林産も亦
少からぬ額を持つて居ります。
寺田より黒澤に至る間道路の南方高地に千年櫻の古木があつて一名
勝地となつて居ります。

俵卷の西背子吉村との境にある鳴澤臺には石器、土器を見出し砂岩の
堀割には海産生物の遺體を多く埋藏して居ります。

小友村

面積　二九方粁一〇　第二十位
人口　二一六七　第二十七位
密度　七五　第十六位

小友村は北方は南内越村、北内越村の兩村に東は上川大内村に南は石
澤村に西は子吉村と本莊町に接し長方形をなして東西に横たわつた
村であります。
地形東方日住山脈が高くそばたち西部は子吉川の平野に臨んで居り

ます六百二米突の日住山の北面に源を有する小友川の上流には地文學上著しき現象として見らるべき甌穴(ジャイアントケットル)の立派な風景があつて八櫃(やびつ)と名付けて居ります是れは天然記念物として保存すべき充分の價値あるものと考へられます此谷を南の股と稱し穴瀧、不動瀧など數多の小瀑布あり金山にて北の股と云ふ支流を合せ役場の所在地三條にて子吉川に注ぎます。

南内越村

面積	二二方粁九二	第二十五位
人口	二一〇一	第二十九位
密度	九一	第十位

南内越村の北方北内越村に南方小友村に西方松ケ崎村と本荘町に接し細谷、柴野、大浦の部落は舊亀田領で其他は本荘領でありました。地形東部の大半は笹森山脈の西面に屬する高地から成り西部は芋川下流の平野であつて本村の主要なる農産地であります東部高地の眞木山の南方に發して長者長敷、福田、横山、細谷などを經て芋川に合する柴野川は本村を東西に貫いて居ります又本荘町との境は子吉川の本流によつて川口、谷地、土谷などの部落を發達させて居ります。主邑川口村の東方に標高約百十米突を有する岩倉臺の高地があります。して戰國時代の豪族内越左近の建てこもつたところと傳へられ殆ど五角形をなし本荘平野を眼下に臨むべき形勝の地位を占めて居り且つ北方の斷崖は植物の根株が岩石を崩壞せしむる作用並びに崖錐(がけくづれ)等の地文的現象を實見するに適當なる場所であります。

岩倉臺の北方に岩倉の湯と稱する鑛泉があつて皮膚病に特効ありとの評があります。

北内越村

面積　二七方粁三八　第二十二位
人口　二二一八　第二十六位
密度　八二　第十三位

北内越村は北岩谷村に東は上川大内村に南は南内越村西は松ケ崎村に境し地形東方に本郡中第一の高地たる笹森山脈をひかへ西に海岸丘陵あり之に沿ふて芋川は南流して縱谷狀をなすところに東方より赤田川の合流する爲に盆地狀の沖積平野を造り深澤、黑瀨、平岡などの農村が發達しました。

赤田東光山　本莊町より芋川の右岸に沿うて上ること四十町にして北内越村平岡に達す此村の入口芋川に架せる橋より見ゆる寺の老木が紅葉した景色は好箇の畫題である是より四十三町の間中ノ目烏前寺などを過ぎて堅田といふ部落にはいる此邊は長谷寺の大佛で名高い赤田村で芋川の一支流赤田川の谷である此溪流に沿ふて溯ること三十二町大瀧に達すここにて赤田川の流が二つに分れる左が本流で右が其支流で則ち東光山道である。

東光山(笹森山)登山　大瀧からは爪先上りの登山道を凡そ十四五町も登ると毘沙門堂に達する四邊老杉蓊欝として脚下に千仞の溪間を臨む此處に腰を下して一と息するのである。

(註)毘沙門天(梵Vaisarvana)は印度に於ける國土守護の神にして城市の

四方を分擔守護する四天王(持國天、廣目天、增長天、多聞天即ち毘沙門天)の一として北方の守護に當り又佛陀の法城を守護す其風裝は身に堅甲を被り掌上に舍利塔を載せ脚下に惡鬼を踏伏す其顏容體勢を見るに沈着なれとも其間自ら威嚴を備ふるを常とす。

毘沙門樣の御蔭で勢を得て再び登り始むると道は愈々急に流汗背に昔ねきを覺ゆる此處第一の難所ともいふべきである凡そ六七町にして左方の絕壁を見上ぐれば奇なるかな峻峯突兀として天に聳へ其間一大洞門をなすところあり岩上松樹の丁々として纔かに根株を維持せるあり風化水蝕の爲に破碎せられたる水成岩の磊磈として谷間に崩れつゝあるなど其奇絕云ふべからざるものがある土俗之を「ホシモチクラ」と稱し昔內越左近が食糧の餅を乾して貯藏せるところなりとか戰爭の時に女衆を避難せしめたる所なりとか種々の傳說あるも信ずるに足らないが併し此山第一の奇景として推稱すべしであるそれより又々峻しい坂を登ること十町程にして右に折れて稍緩傾斜となり一上一下路傍の草木漸く高山性を帶び來り杉柏の如き根本よりヂクヂクと曲つて丈け甚だ低く冬季風雪に壓へらるゝ有樣が思ひ出される時を得顏に生え繁るのは羊齒である此等の事凡て生物地理に興味を有するものをして低徊去る能はざらしむる須臾にして眼界忽ち開けて所謂東光山の絕頂に達する。

頂上の眺望　頂上には少さい祠があつて祀るところの像は余の見るところでは觀世音菩薩の如くである此等の堂祠は悉く長谷寺の管理するところであると云ふ此處に立つて西方を眺むれば日本海は淼茫として極まりなく右に男鹿半島をひかへ左に芹田の岬を望む水天彷彿の間白帆の點々たる汽船の黑烟を流せる稍南方烏海山は早や新し

い雪を冠りとせるなど實に捨て難い風景である脚下には子吉川の平野芋川の谷、赤田の村落一々指顧の間にあり地形の高低、水利の便否一目の下に瞭然と考察することが出來る。

背後の東方は芋川の上流上川大内下川大内の村落點々として算すべく此處海拔五九四米突である。

赤田大瀧　字大瀧より赤田川の本流に沿ふて溯ること十町にして大瀧と云ふ瀑布がある直下五丈の斷崖水流碎けて白玉となり飛沫衣を潤ふすの壯觀に接する、瀑壺深からずして廣く盛夏一日の清遊を試むるに餘りあるところである。（大正四年十月十八日）

本莊中町より字大瀧まで　三里七丁

大瀧より東光山頂まで　二十五丁（登り）

大瀧より瀑布まで　十丁（水を渡ること十ヶ所）

岩谷村

面積　二三方粁六九　第二十四位

人口　二七一四　第二十二位

密度　一一三　第七位

岩谷村は舊龜田藩の領たりしところで北西は龜田町、松ヶ崎村に北東は下川大内村南は北内越村に境して居ります。

地形上本村は芋川の一大横谷が出羽丘陵を突き破つて東より西に流下する部分になつて居ります横谷は概して谷副が狹いのを常としますが芋川は曲折がかなり多い爲に岩谷村附近には頗る廣い耕地をなして居ります高地は川を挾んで南北に連り其東端に權現山（三一七）黑森山（五三〇）の峯が聳へ龜田町との境には有名な折渡峠（二一四）があり

ます。

本村の産業は農産畜産等を主なるものといたしますが岩谷麓の石材は集塊岩質のものがありますが石火鉢及家屋土藏の土臺石として使用せられて居ります。

千人隱れの正體　折渡の隧道と云へば今は誰知らぬものもなく熱海の丹野隧道と相並んで天下の二大難工事として名高いものである折渡の隧道はこれまで土砂の壓出しで苦しむで居たところ近頃堅い岩が現はれてきたので鑿岩機を使用することになつたそうだどんな岩だか見たいものであるが其機を得ないで居つたところたまたま龜田からの歸途折渡峠を越えていわゆる(千人隱れ)の正體を見とどける事が出來た千人隱れとは折渡峠の頂上地藏尊の北にある岩窟のことで龜田町より一里十三町本莊町より二里三十町の處にあり地藏尊のほ

こらから約四五十間、十二曲りの阪道はかなり險しい右手が上黑川の深い谷間で一歩を誤れば容易ならぬ深い澤にころげ落る樣なところだ昔岩谷氏が最上氏と戰つた時に人數を伏せたところだと傳へられるだけあつて如何にも北に向つた斷崖の頂上に出來た岩谷が千人と迄は行かぬにしても正味百人位は坐ることが出來やうたへず天上から岩かけが落ちて下に布かれて居るからだんだん狹くなるのであらう岩のすきまから水もたちたちとしたたつて居る北向きの穴で深い澤に臨んで雜木が繁つて穴の中からはつめたい風がくるから三伏の候など杖を曳くには屈强のところだ地藏尊からの上り坂を少し修繕したら汽車開通の上は一名勝地たるを失はないと思ふさて此岩谷はどうして出來たのであるか岩谷麓から上黑川までの間には第三紀の砂岩、粘板岩などの間に所々に火山岩の噴出がある千人隱れの岩も噴

出岩の一種が水蝕に低抗して折渡峠の頂上に二百十四米突の斷崖となつて殘つたものであらふ其岩質は餘り堅くない浮石狀の岩で風化水蝕が盛んに行はれて一見したところで凝灰質の礫岩樣に見える岩石である岩谷の地名もこゝから起つたものであらふ。

隧道の中に現はれたといふ硬い岩石も此種の噴出岩であるかもしれない何れ實見の上研究して見たいと思ふ。（大正十一年六月）

下川大内村

面積　五八方粁一五　第九位

人口　三八九九　第四位

密度　六七　第十九位

下川大内村は北方龜田町大正寺村に東は大正寺村上川大内村に西は龜田町岩谷村に境して居ります。

本村の地形は西北龜田町との境に權現山(三一七)駒鳴峠等の高地あり西南部に本郡中央山地の連嶺たる黑森山(五三〇)藥師山(三七一)等の山丘があり其間を芋川の本流が東西の方向に流れ其北半に於ては大正寺村比丘尼屋敷方面より來るところの小關川は北方の高地より衆水を集めて新澤の南方に至つて本流に注ぎ此處に一つの盆地を造ります本村が山間にありて比較的村落の分布多きは主として此兩河の作用によるものであります。

從つて本村は農産林産畜産の産業に於て豊富なる産額を示して居ります。

本村の地文的現象で注意すべきは高尾から中張に至る小關川の沿岸

下川大内村高尾小關川ノ甌穴

新澤ヨリ芋川ヲ隔テテ
東方笹森山脈ヲ望ム

水成岩の階段を流下するところに水の浸蝕作用になつて甌穴を見る
ことが出來る事であります。

上川大内村

面積　九五方粁三三　第四位
人口　三六七七　第五位
密度　三九　第二十八位

上川大内村は北方下川大内村大正寺村に東は仙北郡外小友村平鹿郡
八澤木村に南は下郷村西は北内越村小友村石澤村に境する大面積の
村であります。
地形は西境に於て本郡の中央高地たる日住笹森連嶺が南北に縱走し

東境は平鹿郡仙北郡の丘陵が一圓に連り保呂羽山(四三八)大臺峠(二一四)矢立峠(一五三)扇森(一八一)等の峯になつて居ります此兩山脈の中間に保呂羽山方面より發する芋川の上流が殆んど山脈の走向に平行して流れて居ります此河の縱谷が本村の居住地生產地となつたのであります。

支流代内(しのない)川の上流黑森山の山中に岩谷瀧と云ふ瀑布があり高さ五丈瀧口は突出して居るので裏面を見ることが出來ます其傍に是山和尙の遺跡と稱する洞窟があります。

上川大内村は林業產額に於て本郡第一位を占め濶葉針葉共に廣大の森林があり畜產額も亦他村に劣らぬものがあります。

林產種類		
挽材	二七一二石	
製板材	一六二八石	
木炭	六七五〇〇〇貫	
薪炭材	六五九棚(官山を除く)	
杉皮	五〇〇〇間	
其他下駄材鍬臺材等		

大正寺村

面積	四八方粁二一	第十四位
人口	三〇二八	第十五位
密度	六三	第二十位

大正寺村は本郡の北東に位し北は河邊郡の戸米川村仙北郡の淀川村に東は仙北郡大澤鄕村南は上川大内村西は下川大内村と龜田町に境

して居ります。

地形上本村の北半は御物川流域に屬し燒山峠より逸鳥越に至る境界線を分水嶺とし北流して御物川に注ぐところの內川の流域が本村の主要部をなして居ります南半は仙北郡大澤鄕の山地の連續であつて西の一部分は下川大內村小關川の上流となつて居ります。

北端向野と稱するところは御物川の對岸にある一區域であります。

本村の主邑は新波と云ひ御物川の左岸に位して舊幕時代には御物川往復の船貨より運上を取り立てる龜田藩の役所があつたと云ひます大正寺村の產業は農產の外畜產額は本郡第六位を占め林產水產も亦相當の產額を示して居ります。

本村の地形は前記の如く大部分御物川流域に屬しますから交通產業の上に於て由利郡との關係よりも仙北河邊方面と密接な關係を有つて居るのは自然地理上正に然るべきものであります之を由利郡に入れたのは歷史的に龜田藩の領土であつたと云ふ理由であらうと思はれます政治上の境界は必ずしも自然的地理上の理由のみで決定することの出來ぬ事情のあるのは之によつて知ることが出來ます。

龜田町

面積	五二方粁九八　第十一位
人口	三六六二　第六位
密度	六九　第十七位

龜田町は舊龜田藩主居城の所在地にして北道川村、戸米川村、東大正寺村、下川大內村、南岩谷村、西松ヶ崎村に接して居ります。

地形東方に出羽丘陵に屬する山脈は屏風の如くに連つて大平藥師(四二四)檜山峠(三〇一)駒鳴峠(三四五)權現山(三一七)折渡峠(二一四)等の峯をなし大平藥師方面より衣川の本流が西に流れ有名なる不動の瀧となり泉田附近にて福俣川を入れて亀田町に下ります權現山よりは黑川駒鳴の北方よりは蛇川が發して森下にて合流して衣川に入ります。

亀田町の產業の特色は工業就中木綿織物と餡飩の製造でありまして佐藤雄次郎氏の創造せる紫蕨織と云ふのはゼンマイと綿を交織した綿フラン樣の織物で珍しい品であり干餡飩は品質良好の評があります。大正九年の輸出額

縞木綿	四、五〇〇反	一一、七〇〇圓
絣木綿	五〇〇反	一、二五〇圓
織色木綿	三五〇反	七八〇圓
タオル	三〇〇	七五〇圓
紫蕨織	一、三〇四反	六、五二〇圓
干餡飩	一八、〇〇〇貫	一八、〇〇〇圓

亀田の一日(編者舊稿)　途上瞥見……歴史的都邑

一、途上瞥見　六月十六、七兩日は珍しくも土曜日曜續いて非番に當つたので亀田不動の瀧を見るべく五萬分一の地圖と磁石をポケットに入れ輕裝して午後から本莊を出た變化のない海岸の砂濱と丘陵の續きではあるが道の兩側はばら色のはまなす、黃色は都草淺黃のあづま菊や濱えんどう、濱ひるがほ、きりん草のやうな草花が時を得顏に咲きみだれて道行く人を慰めて居る、三川、小屋川、親川、芦川、折林など同形式の部落を經て松ヶ崎についた。

二、歴史的都邑　松ケ崎から東へ衣川に沿ふて一里にして龜田町に入るのであるが凡そ十五六町に亙る立派な老松の並木は先吾人に一種のゆかしい感じを與へる並木の終るところ竹橋といふ橋を渡り大きな榎樹のもとに地藏を安置してあるあたり何となくさびしさを覺ゆるきけば此近邊にもとの御仕置場があつたといふことである間もなく龜田の町家が見えて來る地文學上より此町を觀察すると衣川の造つた狹い河成段丘上に發達した都邑といふべきであるだから山間溪流の合流する盆地に發達した矢島町や三角洲の上に建てられた本莊町などとは地形上に於て頗る趣を異にして居る町に入りて昔風の機織の音をきき杉の葉で造つた酒家の看板を見ては前世紀の感を與へられ舊暦の端午に當るといふので内のぼりを戸口に飾りそろへた有樣を見てはそぞろに封建時代の昔がしのばるゝ思ひをなした何れの點から見ても此町は歴史的趣味に充ちたところである川の右岸鎭守の森の熊野神社、龍門寺の藩主の御廟屋左岸に於ける赤穗津城趾、岩城氏陣屋址、何れ懷舊の種ならぬはない殊に地名に優雅なるもの多いのは藩祖が名門の出なりしを語るものではあるまいかと思はる。

三、不動瀧　午後四時龜田町より衣川に沿ふて富田、泉田、瀧の又を過き約二里にして不動瀧に至る柱狀節理をなせる安山岩の斷崖高き五丈半副十五間其中央より凡そ二丈の廣さを以て落ちて居る水量多からずと雖も一大壯觀たるを失はない盛夏の清遊紅葉時の秋遊には適好の名勝地である。

四、歸途の印象　龜田一日の觀察を了り翌日午後五時歸宅の途についた昨日の濃霧と變り空晴れて日本海の藍色あざやかに男鹿半島

の山々が海面に突出して見える長い六月の日も西北に傾き午後七時に近くなると、夕燒けの色漸く赤く太陽まさに海に沈まんとする刹那の光景はさながら黃金の波をたたよはすに異らない、はまなすの色は夕日にてらされて云ふべからざるあでやかさを增してくる、あゝこの絕景、自動車、馬車、人力車の客は早や去りて眺めを共にし得ない、一日の仕事を終へて歸らんとする農夫、海人、徒步旅行者のみは予と共に此眺めにあつかる事を得た自然は吾々貧民に向つてかゝる絕大の美を恣いまゝに味はゝしめて毫も報酬を求めない。（大正六年六月十八日稿）

松ケ崎村

面積　三〇方粁九四　第十九位
人口　二八八八　第十八位
密度　九三　第九位

松ケ崎村は北道川村、東龜田町、岩谷村、南内越村、北内越村に境し南は本莊町に隣り西方一帶日本海に面する眞直なる海岸をなして居ります地形一般に海岸に平行する丘陵の間を横斷する數多の小谿谷から成て居り都邑は悉く海岸に近く是等小河流の河口に出來たもので主邑松ケ崎村は衣川の左岸にあつて役場、學校、郵便局等があります其他芦川、親川、小屋川、深澤、三川など悉く衣川と同形式の小河の出口に發達した村落であります。

松ケ崎村の產業は地形の性質上農業、林業等に見るべきものがありませんが水產業は頗る盛なもので本郡第三位の產額を示して居ります

水産物の主なるものは次の如くであります。

鰮	六五〇〇〇貫
鱈	三〇〇〇貫
鮫	五〇〇〇貫
鮭	六〇〇〇貫
鰤	
雑魚	

松ケ崎村は昔赤穂津と申したところで慶長八年由利郡の大部を領有せる最上義光の臣楯岡豊前守満茂は此地築館城趾に住し慶長十五年本荘に築きて移るまで由利政治の中心たりしところであります此故に本村の北方亀井山にある八幡神社は本荘町の縣社八幡神社の前身と稱せられて居ります。

道川村

面積	五二方粁七八　第十二位
人口	三〇〇一　第十六位
密度	五七　第二十二位

道川村は舊亀田藩の領地たりし所で北は下濱村東は河邊郡戸米川村南は亀田町及松ケ崎村に境し西方一帶日本海に面する眞直の海岸をなして居ります。

地形一般に南北に連互する海岸丘陵を東西に浸蝕したる小横谷から成り立つて居り中央の君ケ野川の谷最も大に其北勝手川其南二古川の谷が之に次ぐもので君ケ野川の下流に主邑内道川がありますが昔の道川村はこれより一里程の海中にありし跡ありとの傳説があります

が現今は海岸の陷落する樣な形跡を見ることが出來ません道川村は本荘秋田間の中途に當りますから鐵道開通前には秋田街道の主なる

宿驛でありましたが今は交通の要地と云ふよりも石油業の爲に稍や活氣を呈して來ました今道川油田の狀況を述べますれば

大正十一年三月十五日午後三時三十分道川村内道川中ノ澤帝國石油株式會社綱堀第二號井は七十五間にて俄然噴油をなし第一回は午後三時三十分より十三分間第二回は三時四十三分より十七分間第三回は四時二十二分より約三十分間自噴し間歇的に噴出しつつあり而して油量明かでないが日産五百石餘ボーメ度三十二度ありと申します

本綱堀第二號は背斜軸に近い西翼に堀鑿し第三紀中部層の砂岩及頁岩の互層を貫き黑色頁岩層を堀鑿し地表よりの深度七十五間にして噴油したもので第三油層に該當するものであります。

第一油層は地表より深度三十六間乃至五十間の間にありて一油井につき出油當時は日産十石ありました而して第一油層は地質上第三紀中部層に屬する砂岩及頁岩の互層と下部層に屬する黑色頁岩の境界附近に賦存するもので第二號井の油層は即ち黑色頁岩層の上部に賦存せるものであります本油産地に至るには秋田驛より十二哩餘道川驛に下車し君ケ野川に沿ひ數町にして達します。（千谷氏）

下濱村

面積　三九方粁四七　第十七位

人口　三一八〇　第十一位

密度　七九　第十四位

下濱村は本郡の最北にあり舊亀田藩の領地たりしところであります北東は河邊郡の濱田村、豐岩村、川添村に接し南は本郡道川村に隣して

居り西は日本海に面した眞直の海岸を持つて居ります。
地形は大體に於て南北に走つた海岸丘陵を東西に浸蝕した羽川境川
などの小谿谷と東方御物川に注ぐ小支流の谷から成つて居ります。
主村羽川村は羽川の下流階段上の平地に發達した村落で役場學校郵
便局等がありますが其北方長濱村は昔は秋田街道の一要地でありま
した長濱の本敬寺は蓮如上人の作にかゝる佛像を安置してあると云
ふので古から參詣人の多い寺であります。
本村の産業は農産林産水産等でありますが近來桂根羽川に石油業の
勃興したる爲一段の活氣を呈して居ります。
羽川油田は大正八年一月桂根油田の出油に促されて着手したもので
ありまして大正八年十二月一日深度五十五間で油層に達し日産十五
石を出すと同時に八幡澤蟹澤寺澤等に試掘したのが全部出油し大正

十年五月機械堀第三號大出油をなし日産二百石を出しまして出油の
現在日産七十五石乃至八十石其原油を山上の四百石のタンクに溜め
二吋半の鐵管で下濱驛のタンクに送りそれより汽車にて柏崎製油所
に輸送して居ります。

290
309

大正十二年四月廿九日印刷
大正十二年五月一日發行

編輯兼發行者　秋田縣由利郡教育會
秋田縣由利郡本荘町

右代表者　金澤長吉
秋田市檜山廣小路三番地

印刷者　柳原庭之助
秋田市檜山廣小路三番地

印刷所　はかりや印刷所

終